

平成30年度 鹿児島大学附属図書館貴重書公開

鹿児島 書物と図書館の近代

—〈知〉の集積と展開—



鹿児島大学附属図書館

■ ごあいさつ

昨年から明治維新150年に関連し、鹿児島県内では様々な展示、イベントが開催されています。鹿児島大学附属図書館でも、昨年の貴重書展企画として女性たちの活動にスポットを当て、維新前後の彼女たちの役割の変化、彼女たちの家族関係への影響、そしてその心情について解き明かしました。20回目の節目の開催となる本企画では、鹿児島県における「図書館」の歴史、すなわち、図書館の運営や資料収集にかかわった人々の活動を取り上げました。

この活動はとりもなおさず、鹿児島における「知」と「教養」の基盤形成の歴史でもあります。その歴史を、図書館制度を全国でもかなり早い時期に導入した「根占書籍館」の設立から解きほぐし、その後、鹿児島では何の書物がどのように流通・集積してきたか、どのような人々がそれを集め・利用してきたのかを、県内外の資料を用いて明らかにしました。これらの資料は、来館された皆様の知的好奇心を強く刺激するとともに、近代における政治や社会の変動がどのような言葉や思想が糧となり形成されたかを知らせてくれ、ひいては今後の150年を考える貴重な知識になると思います。

最後になりましたが、今回の企画展開催に当たりご協力を賜りました、南大隅町根占図書館、鹿児島県立図書館、長崎県立長崎図書館、ミュージアム知覧、椋鳩十文学記念館、新村出記念財団、宮城県亘理町立郷土資料館、並びに加治屋清之氏、潮田登久子氏の皆様に心より御礼申し上げます。

平成30年11月 鹿児島大学附属図書館長 鈴木廣志

■ 凡例

- 一、本図録は、平成30年度鹿児島大学附属図書館貴重書公開「鹿児島 書物と図書館の近代——〈知〉の集積と展開——」展の展覧図録である。
- 二、今回の貴重書公開は、鹿児島大学附属図書館が所蔵する貴重書のほか、南大隅町根占図書館、鹿児島県立図書館をはじめとする諸機関の所蔵品の現品ないしその写真を展示し、明治初頭から昭和戦前にかけての時期における書物史の実相を示すようにした。
- 三、史料の引用に際しては、読みやすさに配慮し、旧字体を通行の漢字・仮名に改め、句読点を加えるなど、改変を加えたところがある。
- 四、今回の貴重書公開は、平成30年度鹿児島大学学長裁量経費「明治維新150周年記念事業プロジェクト」による成果の一部である。

表紙写真説明

潮田登久子『BIBLIOTHECA 本の景色』（幻戯書房、2017年）より（p41）。ヘボンの辞書『和英語林集成』から覗く、雑誌「文藝倶楽部」特集「明治俳句風流陣」の広告。

目次

ごあいさつ / 凡例

目次..... 1

第一部 書籍館—図書館の黎明—..... 2

根占書籍館史.....	3
磯長得三.....	3
根占書籍館の光芒.....	4
熊本県私立共同書籍館設立ニ関スル意見書草稿.....	6
寺田望南.....	6
小牧昌業・寺田望南宛書簡.....	7
重野成斎・西村天囚 両博士評批之原稿 明治十七年中.....	7
鹿児島発、蔵書家たちの近代.....	8
旧藩時代の書物環境とその行方.....	9
知覧文庫.....	10

第二部 鹿児島県教育会附属図書館の成立..... 11

鹿児島県の図書館の蔵書数について—明治35年から明治44年まで—.....	13
大正期の県立図書館の蔵書数.....	14
寄付金.....	15
図書館と書籍商.....	15
旧制中学造士館から来た書籍.....	16
加納文庫.....	16
寄付する人々（1）.....	17
鹿児島県における巡回文庫の始まり.....	18

第三部 鹿児島県立図書館の成立..... 19

図書の受け入れ.....	20
初代館長 片山信太郎.....	21
寄付する人々（2）.....	22
大正天皇即位と図書館.....	23
郷土史料の充実.....	25
観光集 巻七.....	26
郷土史家 加藤雄吉と坂田長愛.....	27
ブックリスト小出満二.....	28
鹿児島県立図書館と島津家臨時編輯所.....	29
玉里文庫と県立図書館.....	29
蔵書印.....	30

第四部 戦前から戦後の図書館—「通俗教育」と「郷土」—..... 31

二代館長 奥田啓市—書物を蓄え、人を運ぶ—.....	32
斎藤茂吉と奥田啓市.....	34
奥田啓市宛吉田絃二郎書簡.....	34
長崎県立長崎図書館初代館長 永山時英.....	35
山本實彦—読者を探す—.....	36
昭和2年10月22日 新図書館落成.....	37
日本図書館協会大会.....	38
皇室国体国民精神に関する図書目録.....	39
博物部と科学館.....	39
麿城（鹿児島）史談会と『神代三山陵』.....	40
島津田鶴子と鹿児島の史料.....	41
三代館長 加治屋哲—図書を守る戦い—.....	42
戦前の図書館と戦後の図書館—椋鳩十と島尾敏雄—.....	44
近代鹿児島の図書館略年表.....	45

第一部

書籍館—図書館の黎明—



明治期以降の日本で啓蒙書として広く読まれたベンジャミン・フランクリン『フランクリン自伝』（1785年）には、Libraryの創設に関する一節がある。18世紀前半、ボストン南部の本屋はいずれも事実上文房具屋のようなもので、暦や歌の本や教科書程度しか置いておらず、読書に志あるもの（those who loved reading）はイギリスに書物を求めなければならなかった。こうした欠乏状況を解決すべく有志の本を集めて醸出金と貸出料を取る Library を作った結果、当地の発展に寄るところ大であったとフランクリンは語っている。

明治20年代に『フランクリン自伝』を翻訳した人々は、「Library」を「書籍館」と訳していた。明治5年（1872）の東京博物局内書籍館を筆頭として、全国各地に次々と誕生してゆく「Library」は多く「書籍館」と呼ばれ^(注)、「書籍室」「集書院」「図書室」「書籍縦覧所」そして「図書館」と呼ばれることもある。幕末維新时期には「文庫」などの呼称を用いることもあった日本において「図書館」という言葉が定着するのはかなり後のことであり、用語の変遷が示すように、近代日本における Library の概念と実態は微妙に揺れ動いていたのである。

とりわけ異なりが大きいのは、日本の各地域における「書籍館」の実態であろう。大英博物館を一応の理念としたとされる東京博物館内書籍館と、博物館に先立って書籍館が成立することの多い各地方の場合とでは、Library の設立経緯や運用に違いがあることは言うまでもない。書物の「閲覧」を可能にする組織は、公共機関と私的な読書会との中間領域のようなところで展開したと見る方がおそらく実態に即している。どの人が何に関する書物を求め、どのような組織がそれに応えたのかを尋ねることは、したがって各地域における〈知〉の実相を明らかにすることに繋がるはずである。

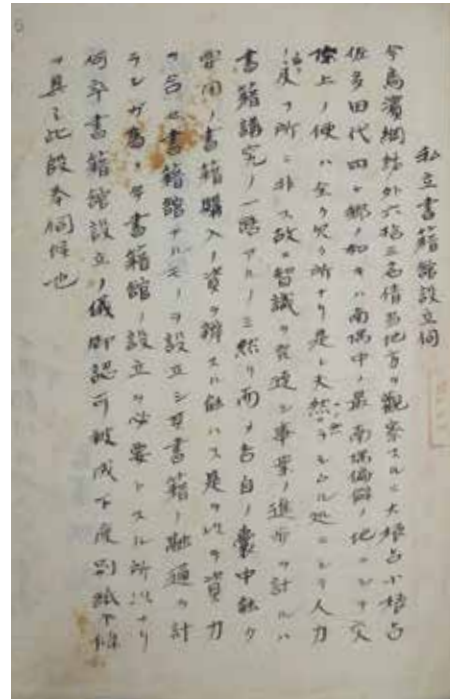
本章では明治初期の鹿児島で書物にかかわった事象と人を紹介する。鹿児島では明治16年（1883）に私立根占書籍館が設立され、書物を広く地域に供給する本屋以外の機関がはじめて登場することになる。一方で江戸時代以来の読書人たちは、その知識を縦横に活用し、維新後の日本における書物環境の整備に力を貸してゆくことになった。

明治初期に書かれた「未来記」ものの小説——遠い未来、日本が超近代国家になったさまを描く物語——には、万巻の書を瞬時に一望し閲覧することのできる図書館の姿が繰り返され書きこまれている。過去を知り、未来を読もうとした明治の人々は、知識の器である書物と図書館とを近代国家の必須条件として切望していた。明治のSF小説に描かれた書物環境がインターネット上に実現しつつある今日、読書に志あった明治人たちが空間の制約とどのように付きあっていたのかを、資料に尋ねてみることにしよう。（多田）

(注) 「ショセキカン」「ショジャクカン」と両様の読みがあるが、現在鹿児島では「ショジャクカン」と読みならわしている。

根占書籍館史

編者不明。現在の南大隅町立神山小学校内に置かれた、根占書籍館の設立経緯と運営状況を語る史料。戦後、田島一保が平瀬戸清吉宅に疎開した資料群から発見した。明治16年における私立根占書籍館設立伺から明治22年（2丁分のみ明治30年の資料あり）までの資料を合綴したもので、「根占書籍館事記」「社員出金徴収簿」「書籍及金員寄附帳」「根占書籍館資金本掛簿」「書籍目録」などを含む。「私立書籍館設立伺」には、「大根占小根占佐多田代四ヶ郷ノ如キハ南隅中ノ最南隅偏僻ノ地」であり「智識ヲ発達シ事業ノ進歩ヲ計ルハ書籍講究ノ一路アルノミ」と、読書に賭ける切実な思いが記されている。設立前後の経緯と関係者名を明かす「事記」「徴収簿」の内容、明治16年から20年までの収集書目がわかる「書籍目録帳」、明治16年から18年までの貸出状況を記した「書籍借用人」は、いずれも近代図書館史の重要史料である（→p 4 参照）。（多田）



「私立書籍館設立伺」を綴じ込んだ箇所。「最南隅偏僻ノ地」に「智識」を「発達」せしめようとする思いが書かれている。南大隅町根占図書館蔵。

いそながとくぞう 磯長得三

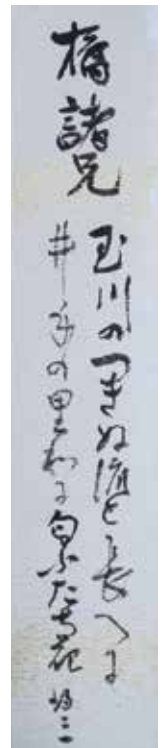


磯長得三 ◆

嘉永2年(1849)-大正12年(1923)。遠戚に薩摩英国留学生の一人である中村博愛がいる。明治4年上京、松本荘一郎に測量技術を学び、明治12年に東京測量社を設立した。東京測量社は神田上水、玉川上水、横浜市街下水改良の測量などを手がけている。インフラストラクチャの整備と書籍館の設置の双方に尽力した人物の例としては、他に作家・永井荷風の父である永井久一郎などがある。

磯長は明治15年(1882)に一旦帰郷、その折鳥浜綱紘、坂田省三らと語り、根占書籍館設置の計画とバックアップを行ってゆく。明治37年まで根占書籍館に「時事新報」と「日本新聞」の定期購読費を継続的に寄付していたことが同年2月17日付書簡によって知られ、また大正8年には杜絶しかけていた書籍館に金一万円を寄付してもいる(田島一保『樟南にかがやく人々』1998年)。

磯長は西郷隆盛が西南戦争出兵直前に狩猟地とした平瀬家を遺跡として保存した。同家には現在、磯長による「南洲翁宿所の碑」が建つ。和歌は黒田清綱に師事。妻ふみの甥は詩人の野口米次郎である。(多田)

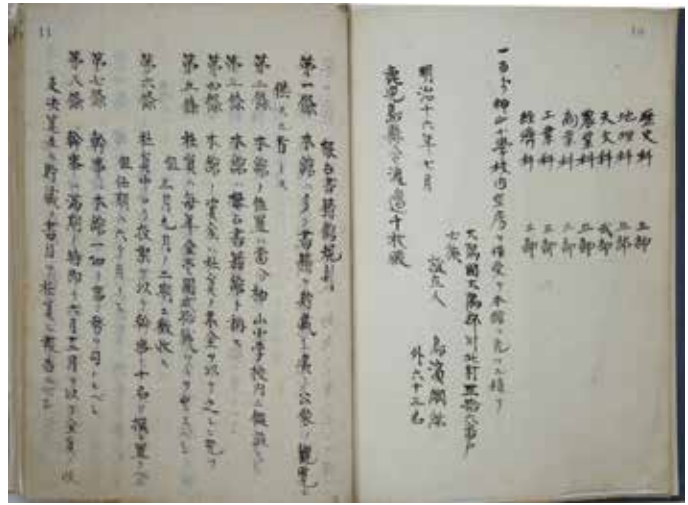


磯長得三短冊「橋諸兄 玉川のつきぬ流を長へに井手の里わに匂ふたち花得三」(個人蔵)

◆…南大隅町根占図書館蔵

ね じ め 根 占 書 籍 館 の 光 芒

明治16年(1883)七月、蓬原直左衛門・西本清言・坂田長経の三者(川北村川南村山本村横別府村辺田村学務委員)名義で、鹿児島県令渡邊千秋宛に小根占書籍館の設立伺が提出された。渡邊は明治17年(1884)一月学第八号にてこれを認可、「但公立神山小学校内備受之儀ハ該学校之承諾を経更ニ開申可致事」とのただし書きがついている。



「根占書籍館規則」。運営方法や「見料」の細則が定められている。◆

この書籍館と現在の「図書館」との大きな違いとして、「社員」からの「集金」で運営が成立し、社員外の間から

「見料」すなわち閲覧料を取った点が挙げられる。書籍館の「社員」となった者は毎年1円20銭を拠出し、社員外は見料として、原価1円以下の本については1日金4厘、3円以下は3厘、5円以下は2厘、5円以上は1厘を出す(ただし「赤貧ニシテ実際見料ヲ払フ能ハサル者ハ幹事ノ見込ヲ以テ見料ヲ徴収セス」)。集金は3月と9月、4月と10月に幹事総会を開き、幹事は6月と12月に収支決算と「貯蔵書目」の報告を行う。設立当時は、集金額の半分を書籍購入費にあてることが予定されていた。なお明治15年(1882)の段階で認可されていた「書籍館」のうち、閲覧料を取ったものは東京教育博物館内図書室、浦和書籍館(中学師範学校所属)、栃木県書籍縦覧所(独立)、京都の集書院(府立)、福岡博物館である(『学校幼稚園書籍館博物館一覧表』明治15年)。官立・府県立・独立(私立)の別や学校内設置か否かということとは別に、地域ごと、設置の時期ごとに運営に様々な違いがあったことを知ることができよう。

年ごとに報告された図書目録を見るに、明治16年の段階では『日本史略』『農工商小学入門』『家事経済訓蒙』など、ごく入門的な史書、小学教科書教訓書など32点が並ぶのに対し、明治17年には書目が55点に増えるだけでなく、「修身科」「数学科」「心理科」「歴史科」などの「科目」分



『革命史鑑』など政治関係の書が複数回貸し出されている。◆

類が生まれる。とくに「心理科」「政治科」にペイン著・井上哲次郎訳『心理新説』、ギゾー著・山口松五郎訳『代議政体原論』、小野梓『国憲汎論』など先端的な理論書の名が見え、また「雑書之部」に福澤諭吉『時事小言』、矢野文雄(龍溪)『訳書読法』などの慶應義塾の人々による出版物が並んでいる点に注意すべきであろう。17年の目録には『甘泉堂書目』『丸善書籍目録第二集』の二冊の出版目録が収まり、甘泉堂すなわち山中市兵衛と丸善から出た慶應義塾関連の書目

を集中的に収集したことが知れる。教科書関連では文学社の書目も多い。江戸以来の教訓書や小学校教科書のなかに西洋の新説を伝える近代啓蒙書の群れが到来する、その伝達の早さにはやはり目を瞠るべきものがある。

これらの書物は実際に貸し出され読まれてもいたことが、『根占書籍館史』に綴じ込まれた「書籍借用人」によって知られる。借用書に多いのはとくに「政治科」「心理科」「雑書之部」の近代啓蒙書であり、『革命史鑑』や『代議政体原論』、

『国憲汎論』といった書、あるいは西周や福澤諭吉の言葉によって、近代の政治社会制度に関する知識がもたらされていった。根占は西郷が西南戦の直前まで滞在した地であり、戦争の記憶がとりわけ生々しく息づいていたであろう根占で『革命史鑑』がどのように読まれたのか、残念ながら知る手がかりは今のところないけれども貴重な読書記録であろう。

ただし根占書籍館は、この地域における唯一の〈知〉の流通形態であったわけではない。たとえば明治16年の「根占書籍館事記」を見ると、下村重賢という人物が「社員」として名前を列ねている。重賢の息子重麿（1873-1949）は篤農家、農事小組合の設立者として知られる人物だが、南大隅町根占図書館が所蔵する下村家資料は、書籍館の蔵書とは少々異なる独自の蔵書を形成していた。蔵書の根幹は農書などの実用書だが、漢文の素養を示す書が散見し、成島柳北『柳橋新誌』（明治7年）などの風流にわたる籍をも所蔵する。重賢の代、下村家には漢詩や和歌を学習し詠みあう習いがあり、滞在した文人との応酬を示す資料も複数残存するのだが、こうした雅文芸への志向を根占書籍館の蔵書に確認することはできない。

下村家は書籍館設立に関わった磯長得三と大正期まで深い交わりを続け、磯長から下村家への書簡も複数現存する（南大隅町所蔵）のだが、書籍館への醸出金徴収簿を見るに、明治16年の箇所には徴収印が確認できるものの明治18年の箇所には印はない。『根占書籍館史』中、年間の利用者数について「女 ナシ」と記した語が目につくけれども、近代以降の読書を考える際には、これら



根占書籍館設立当初の蔵書中、現存する三冊 ◆



下村家文書より、漢詩・漢文の草稿資料（南大隅町蔵）

これらの書籍館と関わらなかった人々の読書体験をも視野に収めておく必要があるだろう。複数の史料を綴じ込んだ『根占書籍館史』は、書籍館が開いた読書空間と、地域に確実に根づいていた近世以来の文事、そして女性たちの文事が同時並行的に展開する場があることを教えてくれるのである。（多田）

◆…南大隅町根占図書館蔵

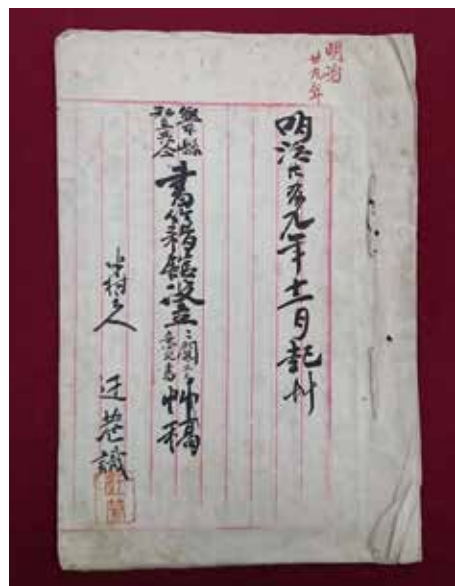
熊本県私立共同書籍館設立ニ関スル意見書草稿

池松迂巷（常雄、明治8年（1875） - ?）筆。池松は熊本の人、熊本第五高等学校に赴任した夏目漱石との交友で知られ、漱石の主宰した俳句結社「紫溟吟社」に尽力した。熊本日日新聞、大阪毎日新聞東京支局長を務める。

本資料（図版）は明治29年（1896）11月起草。熊本市内に書籍館がないことを学生のために嘆き、第五高等学校、師範学校、尋常中学^{せいせいこう}を中心とする学校間の共同運営での書籍館設立を諮る文章である。活字化の有無等は未詳。池松は最大の課題は財源であるとしつつ、書籍館を「会社的換言スレバ株式的ニ組織」し「営利的ノ方法」に出ることは「吾人が厭フ所」であるとし、学生一人十銭、教員三十銭を毎月支出し、蓄えた資金を銀行に預け利息を得るという運営方法を提案している。池松

の描いた共同書籍館構想は実現しなかったけれども、提案の内容は根占書籍館とほぼ同じ方式であり、書籍館構想が短期的な営利よりも知識の伝達に重点を置いたことの一つの証左であろう。

漱石が熊本に赴任したのはこの年の4月13日。ただし後に帝国図書館員になる希望をもちたこともある漱石が池松の言葉に共鳴したかどうか、探る手がかりは今のところない。（多田）



鹿児島大学附属図書館蔵

寺田望南

寺田望南（^{てらだぼうなん}嘉永2年（1849）- 昭和5年（1930））、諱は弘、通称平之進、字は士弧。重野成斎に学び、京都で児小姓を勤め、西郷隆盛・従道兄弟や大山巖と親しく交わり漢詩の応酬をなした。戊辰戦争に従軍し、明治5、6年ごろ官費留学生としてドイツ・フランスに留学。また明治20年（1887）に滞独した井上哲次郎と当地で会ったことも井上の日記に見える。農商務省、文部省で書記官を務め、一度僧籍に入った後還俗した。玉里島津家編輯所に入り、『島津久光公実紀』を編んだ。官僚、僧侶、漢詩人、史家など様々な顔を持ち明治史のそこかしこに顔を出す望南は、稀代の蔵書家としても知られた。静嘉堂^{せい か どう ぶん こ}文庫の形成

に携わったほか、国立国会図書館蔵書中の内閣文庫にも望南の蔵書印を捺した本が多く入る。上海や香港で彼が扱った漢籍（杜甫を好んだことに由来する「読杜草堂」の印記がある）は、現在の中国研究においても善本として知られている。（多田）



『呂氏春秋』（寺田望南旧蔵）
鹿児島大学附属図書館岩元文庫蔵

小牧昌業・寺田望南宛書簡

小牧昌業(1843-1922)は薩摩の人、造士館教授をへて、維新後は開拓使幹事として黒田清隆に仕えた後、内閣総理大臣秘書官、明治天皇侍講、奈良県知事、愛媛県知事などを歴任。

重野成斎、小牧昌業、そして寺田望南はしばしば書物の編纂や集積に関わって協働した。掲出の書簡は書物(タイトル不明)の出版に

関わるもので、小牧は望南が装幀についての指示を行うこと、また西郷家に「製本ノ見本」を送るべきことを伝えている。

拝啓今朝電話ニテ申上候通／昨日濱田氏へ相談致候処製／本之儀何も異議無之候○〔挿入：○其方至而宜カラント賛成ニ御座候〕特／別製本ハ二部○ニテ宜敷カルヘクトノ事ニ御座候其仕様ハ／可然様ニトノ事ニ御座候間夫々／御見立被下工雅ニ仕立方御命シ奉願候序文潤筆標籤紙帙等ノ費用モ話シ置候間是又宜敷御願申上候合巻成冊ノ調／別紙差上申候間更ニ分り易キ様ニ御書カセ渡奉願候右迄草々頓首

五月卅一日 昌業

望南大兄 侍史

再白西郷モ遂ニ往生致候ト見エ製本ノ見本返シ具候様申出候一冊ハ御手ニ差上置候歟ト有之間御序ニ御送り奉願候

(多田)



宮城県亙理町立郷土資料館江戸清吉コレクション蔵

重野成斎・西村天囚 両博士評批之原稿 明治十七年中

「送濱名子寛赴任小倉兵營序」「送西村子俊序」「送重野安紹君序」「送吉田子弼之任金澤序」(以上重野成斎批)、「好文軒記」(批評なし)「難蘆記」(西村天囚批)を合綴。西村子俊は、「大阪朝日新聞」にあってコラム「天声人語」を創始し、島津家臨時編輯所所長となった西村天囚(1865-1924)のことである。

村上信忠(生没年不詳)は『純正蒙求校本』(明治15年(1882))三冊の著者。西村天囚との交わりは文中にも記されるが、重野成斎の子安紹とも親しく交わったことが「送重野安紹君序」に見え、成斎にはその縁で批を仰いだものであろう。重野の文章

は、彼に学んだ天囚の評と文学活動を通じて、薩摩文人グループの外へ、また漢文体の外へと波及していった(会津の鈴木天眼がフランス小説を訳した『政治上之放逐人』には天囚の評がある)。本資料は大正15年(1926)の第十四回上毛考古学会新年会出品目録(「上毛及上毛人」2月号)に豊国覚堂の出品として見える。(多田)



朱字で重野成斎が評を付している(鹿児島大学附属図書館蔵)

鹿児島発、蔵書家たちの近代

幕末維新时期に江戸（東京）に出た薩摩人たちと書物との関わりは、一つには書籍館事業や個人文庫などの蔵書文化形成、もう一つには編纂・校注ものや記録文章の執筆による学問文化形成、の両側面から考えることができる。重野成斎は修史局にあって国史編纂に携わっており、重野の学統に連なる人々が西洋語の翻訳も含めた明治初期文章運動に深く関わったことは有名だが、彼を中心とする文人・学者の文化圏は、近代の〈知〉の根幹となる書物コレクションを作りあげてゆくのである。重野は帝国図書館の創設に力を尽くしており、他にもたとえば近代最大の私設文庫の一である岩崎弥助の静嘉堂文庫は、その根幹蔵書群である陸心源旧蔵書の購求を、重野と寺田望南の両名に負うところが大きい。また東京博物館内書籍館の設置にあたって、永井荷風の父として知られる永井久一郎とともに中心的な働きをなしたのは、薩摩藩英国留学生をリーダー格として率いた町田久成であった。

彼らの学問と蔵書が維新の東京——あるいはその外の世界——で活用された例を二つ見ておくことにしよう。まず、清末の文人・王韜^{おうとう}の来日。王韜による普仏戦争史『普法戦記』は西洋近代戦を漢文世界の視点で叙した貴重な戦史で、栗本鋤雲や亀谷省軒などの幕末明治の文人に衝撃を与えた。中村敬宇や岡千仞をはじめとする当代の文人たちが明治12年（1879）年3月から7月にかけての彼の訪日をこぞって歓待した様は『扶桑遊記』に詳しいが、この王韜の招請は望南が王韜と香港で交流を持っていたことによって実現した。王韜は滞在中重野の邸に泊まって連日文人たちと交流したが、東京書籍館館長であった岡千仞^{おかせんじん}は王韜を東京書籍館に案内してもいた。

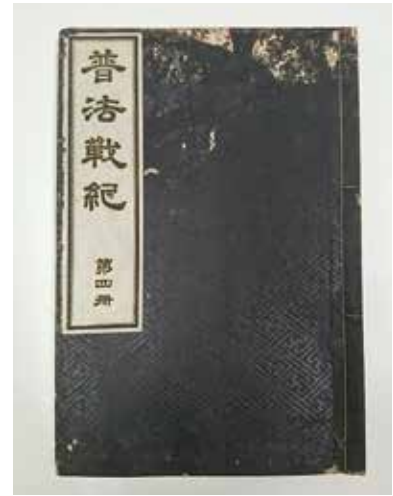
さらに、黒田清隆（1840-1900）の『環游日記』。本書は明治19年（1886）6月23日から同20年（1887）4月21日までにわたる、長崎から朝鮮半島、サンクトペテルブルグ、黒海、地中海の国々を経て奥独仏英を周遊し、渡米ののち帰朝するという長大な旅行の記録だが、黒田の随行員のうちには寺田望南と小牧昌業の名前が見えている。この長大な見聞録の記事は随処に随行員の調査



黒田清隆『環游日記』（鹿児島大学附属図書館蔵）

記録を載せており、ヨーロッパの制度通としての両名の視点が光っている。産物や経済状況を手際よくまとめる随行者たちの文体を、10年近く前に書かれた久米邦武『米欧回覧実記』（明治11年）と対照することで、〈名文〉と〈実用文〉を並び立たせようとする、実践的な文章革新の姿を見ることができよう。

近代日本の文章において、漢文学はかなり長く潜勢力を保ちつづけた。鹿児島出身者たちの蔵書形成と文章作法とは、漢文脈が欧文脈と絡み合いながら展開し〈日本語〉を作ってゆく際の基盤となったのだと言えよう。（多田）



王韜『普法戦記』（個人蔵）

旧藩時代の書物環境とその行方

幕末の安政4年（1857）に島津斉彬が、二人の薩摩藩士に書店を開かせ、藩版の四書五経の売捌きないしは貸付を担当させるとともに、藩内に所属されている書物を流通させる試みを行ったことは有名である。市来四郎は、従来の書籍を巡る藩内の環境について薩摩藩士が武を重んじ文学（学問）を軽視するためだと酷評した。



『官板 白氏文集』（鹿児島大学附属図書館 木脇家文書蔵）

江戸や上方に勤番に出る機会は決して

少なくなかったから、上級の藩士や裕福な町人なら書物を入手して持ち帰ることで自家に〈知〉の集積を図ったであろうことは想像に難くない。たとえば、鹿児島の町人増田温などは長崎に出店持つ裕福な家に生まれたが、奇書・珍籍を収集、それは大名のコレクションにも匹敵するものであった。薩摩藩を代表する国学者のひとり、^{やまだ きよやす}山田清安の蔵書目録が鹿児島県立図書館に所蔵されており、知識人の蔵書内容がわかる貴重な資料となっている。また、中級の藩士でも志のある者はなげなしの金を注ぎ込んで書籍を持ち帰った場合もあった。木脇啓四郎が江戸の町で見つけ、切り詰めた生活費の中から購入した「白氏文集」が残っている（図版）。

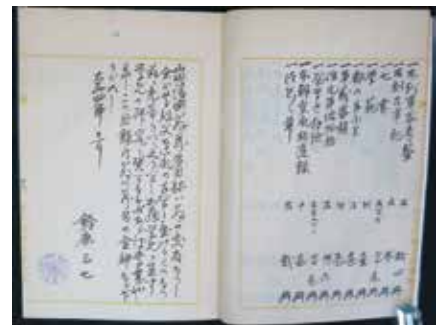
鹿児島大学には玉里島津家の「玉里文庫」が所蔵されているが、ここに流れ込んできた書物の由来は一樣ではないことは言うまでもない。島津久光の養子先である重富島津家にあった蔵書もあれば、久光が一時就いていた「異国船掛」や「御軍役所」に属した本、兄斉彬の旧蔵書で「春藪文庫」の朱印が押されている本、島津家の書物方の本等々、さまざまな本が集まっている。

薩摩藩の書物方（尚古集成館に目録が残る）の書物にせよ、玉里文庫の書物にせよ、必要に応じて藩主やその周辺の人々に貸し出されることがあった。近代では、鹿児島の本が東京に運ばれる、またその逆の場合もあった（その際には記録が残されるが、目録がそれをチェックする時に役立てられた）。

明治維新のような時代の大きな変転に遭遇した場合、書物は焼失、流出、あるいは借りられたまま戻されず本来あるべき場所に戻らないことも多くあったのである。

大名の蔵書にしても組織の蔵書にしても目的が公的であっても伝手がないと本が借りられないわけで、近代の公共図書館のように一定の資格（県立図書館設立以前の私立教育会附属図書館の利用資格は、年齢や職業、保証人の有無などで厳しい制限があったが）さえ備えれば誰でも閲覧、貸借が可能であるのとは大きな違いがあるのである。

鹿児島と別の地域の文庫と比較検討をしてみたい。



『薩州山田清安所持書籍目録』（鹿児島県立図書館蔵）
第2丁裏・3丁表（上）と巻末（下）
古典学者の鈴鹿三七が加藤雄吉に贈呈したものの

書物の町として全国に名を知られている愛知県西尾市の岩瀬文庫は、肥料商で西尾町長も務めた岩瀬弥助（1867-1930）の収集した古典籍群であるが、弥助には、隣村の神職であった渡辺政香（1776-1840）が氏子あるいは地域に対して開いた文庫を模範とし、それを引き継いでいる（塩村耕編『三河に岩瀬文庫あり』風媒社）。同県では神職や企業活動で利益をあげた人物が地域貢献、地域の発展を祈念する意味で文庫を開設し文庫を開放する例などが見られた（愛知県では大正4年開設の滝信四郎の滝文庫など）。



『玉里文庫目録』（鹿児島大学附属図書館蔵）

これに対し、鹿児島では個人の収集した蔵書がそのまま地域に開かれ図書館につながっていくことはなかった。学識者や文人はいたが、富の蓄積が少なく尚武の気風が強いことや戦乱の影響もあり文庫が育たなかったと言えるだろう。近代に入って、岩瀬文庫や滝文庫のような個人の蓄財→蔵書の購入→公開という流れを取らず、同郷の人々が相図って共同出資をして図書館を設置する形（根占書籍館）か、寄付を募りながら〈官〉の主導で図書館を設立する形を取らざるを得なかったのだと考えられる。（丹羽）

知覧文庫

知覧文庫は、知覧島津家18代当主島津久峰（1732-72）の旧蔵書を、その子久邦（1753-91）が鹿兒島城下から知覧の地に移し、知覧の郷校である菅徴館に保管したものである。蔵書には、「知覧/文庫」印が押されている。しかし、知覧文庫は、維新前後の騒乱及び管理の不備、明治29年（1896）の火災のため、そのほとんどを失うことになった。目録は存在せず、その全貌は不明である。久峰は、享保17年（1732）、藩主島津継豊の三男として生まれ、知覧島津家第17代当主島津久豪の養子となり、延享2年（1745）、久豪の死去により家督を相続した。久峰は、学問に厚く、特に漢詩と茶の湯に造詣が深かった。漢詩集として『毅齋遺稿』があり、その他、『白鷺洲』という茶の湯に関する聞き書き記録がある。これは薩摩を代表する画家、茶人の木村探元の元に7年間通いつめ、聞いた内容をまとめたものである。（高津）



『誌経』（ミュージアム知覧蔵）

第二部

鹿児島県教育会附属図書館の成立



通史では根占書籍館が設立されてから、鹿児島県教育会附属図書館ができるまで、図書館の設立について記述されることは少ない。例外は明治14年（1881）川辺郡知覧村出身の折田兼至（鹿児島県議、衆議院議員）が呼びかけて設立され、知覧文庫の基となった新聞縦覧所に触れる程度である（『九州図書館史』）。

明治35年（1902）の教育会附属図書館成立以前にも川内で、図書館設立の動きが見られた。鹿児島新聞（明治30年8月13日付）は「川内図書館の組織」と題して次のように書いている。

川内図書館の事に就て有志の人の協議中なりし旨は再々同地よりの通信に見えたるが、其後其議も愈々纏まりしと見え平佐の吉村兼富氏、隈城の武満義雄氏其他総て十二人の発企にて同地方出身の各氏への賛成を求められたり……

として19条にわたる「川内図書館倶楽部規則」を掲げている。注目されるのは発起人の一人吉村兼富で、彼は教育会附属図書館の初代館長（鹿児島第一中学校長と兼任）に選任されていく人物である（「鹿児島教育」106号）。川内における図書館設立をうけて（なお、成否は未詳）附属図書館長を委嘱されたものと思われる。

時間は前後するが、明治20年代から全国的に半官半民の教育会と呼ばれる組織が作られていった。多くは県知事をトップとして教員を中心に組織され、教育に関する諸研究、研修、社会教育事業などが行われていった（図書館設立のその柱であり、地方の県立図書館の多くは教育会附属図書館を起源としているものが多い）。鹿児島県では明治20年（1887）に鹿児島県教育会が組織された。

鹿児島県教育会附属図書館の設立は明治33年（1902）5月に代議員会で可決され、寄付金が募集されることになった。図書館を新築するには至らず、中学造士館を廃止して第七高等学校造士館を設置することになっていたため、中学造士館の建物（物理教室、暗室、附属仕事場）の三棟を島津家からもらいうけ、敷地は加納久宜知事に請願して県庁構内の空き地を借り受けて建物を解体、移設することとした（p16参照）。

一方、明治34年10月、加納知事の功績を讃え「加納文庫」を計画していた加納文庫設立委員と協議して図書館本館にこれを附設することが決定された。明治35年1月に起工、3月15日竣工。図書を購入などを得て、8月11日に開館した。本館敷地は366坪6合余、建坪は68坪。創立時までの支出は1714円23銭7厘、蔵書数は1599部であった。なお、明治44年1月16日より館名を「私

立鹿児島図書館」と改称した。

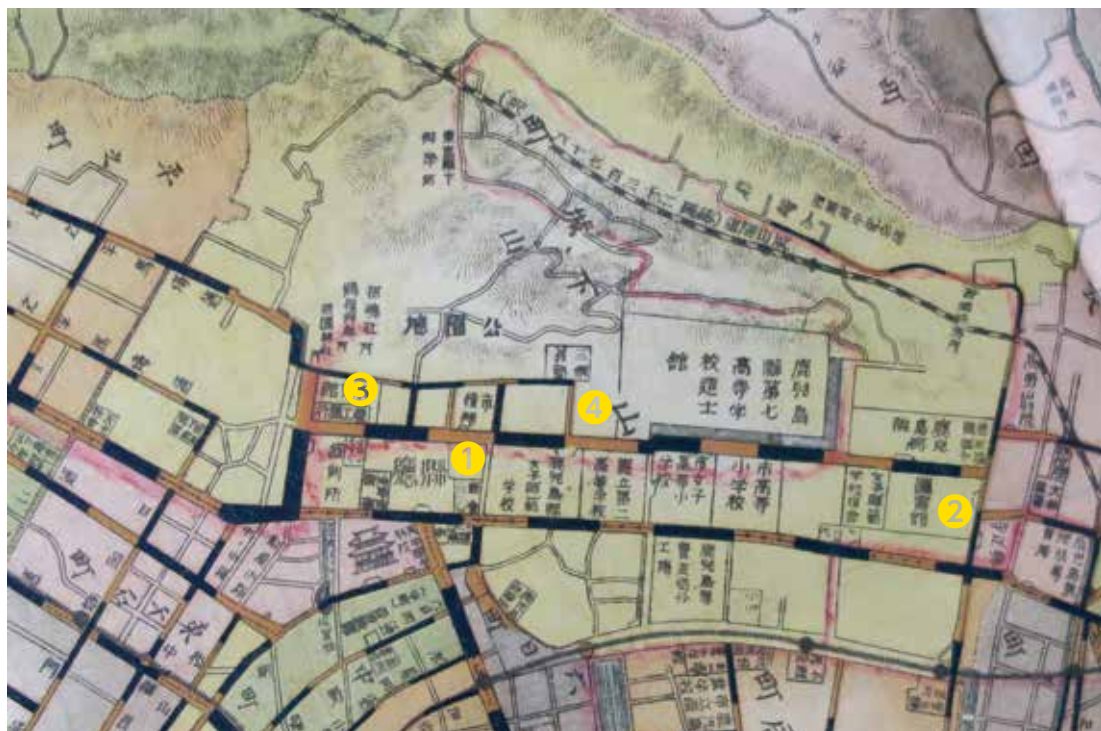
現代の公共図書館と異なるのは、第一に組織が簡素であることで、館長一人と書記若干人、必要に応じて図書の選定若しくは分類等に関し必要あるとき嘱託を雇った。外部委員として商議委員を設置することがあった。第二に、利用に際しては料金が必要であることで、利用者は「求覧券」(特別三銭、尋常一銭で回数券も用意されていた)をあらかじめ購入する必要があった。特別求覧券を持つものは、特別席で閲覧ができ、一度に借り出せる冊数も優遇された。第三に開館日数の多さで開館日数は年に約337日であった。開館時間は月によって異なるが冬期は午前9時から午後4時、夏期は午前8時から6時を基本とした(春秋はその30分~1時間伸縮)。

下の地図は大正7年吉田書店発行の「鹿児島市街略図」の、現在の鹿児島市城山町周辺の部分を抜き出したものである。これを用いて図書館の空間的な変遷をたどっておこう。

開館当初は、県庁の一角(現在の中央公園、地図の①)にあったが、県立図書館になってから、もと鹿児島県立第一中学校が西田村に移転した跡地(現在の県民交流センター、地図の②)に移った。老朽化のため、新築の必要性が叫ばれたが実現したのは昭和2年10月のことであった。地図の③の位置に建てられた。これは現在、県立博物館となっている。

戦後の明治維新百年を契機として新築計画の気運が高まり、昭和54年9月、旧二の丸の位置に移転、現在に至っている(地図の④)。

地図を見ると、図書館の周辺には県庁や市役所といった官庁や七高造士館を初めとする種々の学校が集まっていることがわかる。全国的な傾向だが、図書館利用者は圧倒的に学生が多く、次いで実業家、官員と続くのはこの地理的な問題が大きいのである。(丹羽)



図書館位置の変遷(「鹿児島市街略図」大正7年、部分)

鹿児島県の図書館の蔵書数について —明治35年から明治44年まで—

『鹿児島県統計書』（学事の部）の記載によって、明治35年度から明治44年度まで10年間の、鹿児島県の図書館の蔵書数を見てみよう。

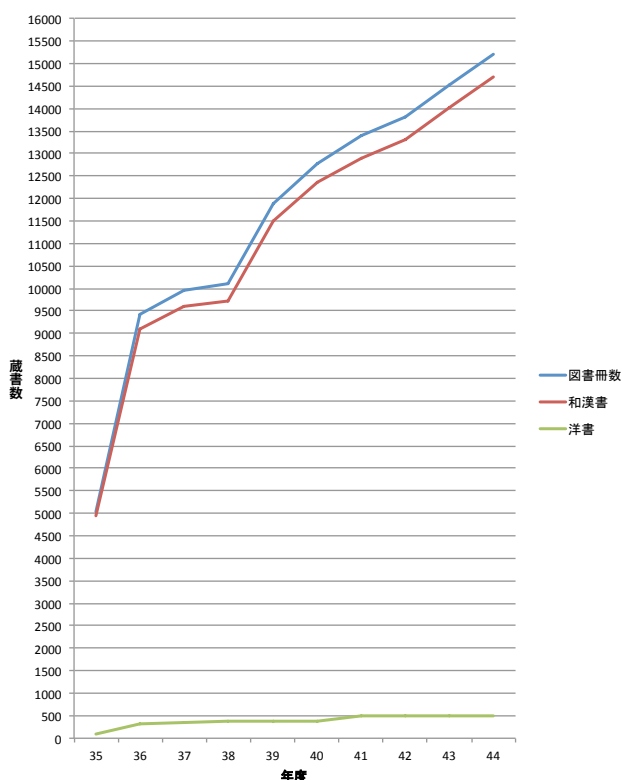
まず、私立教育会附属図書館（私立鹿児島図書館）は、この10年間で、5030冊から15202冊に増加し、3倍強になった。明治35年度は1年間で、一挙に5030冊から9426冊に増加した。二番目のヤマは明治38年度に現れ、およそ1200冊の図書が増加した。明治36年度から明治38年度までは、年に100冊程度の増加だったものが、明治39年から明治44年までは、年平均6700冊程度のペースで増加する。和漢書と洋書を比べてみると、明治44年度に至って、和漢書の蔵書数は14692冊で、洋書に比べ30倍で圧倒的に多かった。洋書数は最初の93冊から510冊に増え、全体的には増加する傾向が見られる。

次に、鹿児島初の図書館である私立根占書籍館の場合はどうであったのか。明治17年の時点で55点187冊であった蔵書は、明治35年から10年間で286冊から1048冊（3.5倍）になった。一番目のピークは35年度で図書は286冊から518冊に増え、倍近い伸びを示した。二番目のピークは38年度で550冊から939冊に、389冊増加した。ほかに、36年度から38年度までは年平均に15、6冊の程度で、39年から44年までは平均、毎年20冊のペースで、緩やかに蔵書数は増えていた。和漢書数は洋書数の20倍ぐらいであった。37年から40年まで洋書数の伸びない状態で、ずっと41冊のままであった。また、明治41年から明治44年まで洋書数は51冊で、この3年間も洋書は全く増えていない。

以上の蔵書数の状況から、明治35年度から明治44年度まで鹿児島県の図書館の発展状況の三つの特徴が得られる。まず一つは、大きい規模の私立教育会附属図書館にしろ、小さい規模の根占書籍館にしろ、明治35年から明治44年までの10年間で、鹿児島県の図書館の蔵書数が増加する傾向が見られる。二番目は、35年から36年までの1年度と38年から39年までの1年度は、私立教育会附属図書館も根占書籍館も蔵書の増加は極めて目立っていることである。これは私立教育会附属図書館が設立され、盛んに寄付が呼びかけられ、別項（15ページ）で見るように金銭と図書の寄贈が実際に多かったことと対応している。三つめの特徴は、38年から39年までの1年間、私立教育会附属図書館も根占書籍館も洋書の増加は停止したこともあるほど鈍かったことで、洋書を読む読者は一部に止まっていたことがわかる。（高）

年度(明治)	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
図書冊数	5030	9426	9952	10101	11871	12760	13390	13808	14521	15202
和漢書	4937	9106	9590	9726	11496	12369	12906	13322	14033	14692
洋書	93	320	362	375	375	391	484	486	488	510

**鹿児島県私立教育会附属図書館蔵書数
(明治35-44年)**



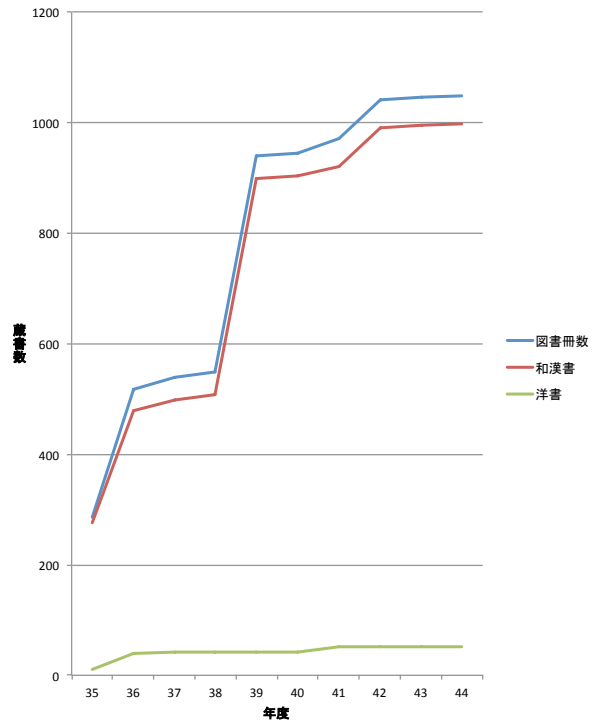
大正期の県立図書館の蔵書数

大正期、鹿児島県立図書館の蔵書数について蔵書点数と冊数の変化を、当時の図書の受入簿、『鹿児島県立図書館新築落成記念誌』（昭和2年）のデータを用いて示してみよう。県立図書館は私立鹿児島図書館の蔵書を引き継いでいるが、鹿児島図書館時代の最も新しい受け入れ書籍が6217番（明治45年3月20日受入）であるので、4月1日の移管当時は、6200点余の蔵書があったことになる。蔵書数は、14500余冊（『鹿児島図書館概報』1910年）である。しかし、県立図書館の統計では明治45年・大正元年の冊数は10410冊となっており、データに違いが見られる（今回は県立図書館のデータに基づき冊数の変化を見ることにする）。

蔵書が年を追うごとに増えていくのは当然であるが、大正元年から大正10年までの10年間は、毎年冊数が前年度に比べて三千～四千冊の伸びを示しているのに対し、大正11年からは、1万冊以上の差が出ている。原因は図表に示したように図書費の増額が最も大きな要因で、社会教育（通俗教育）への予算が大きくなっているからであろう。（高）

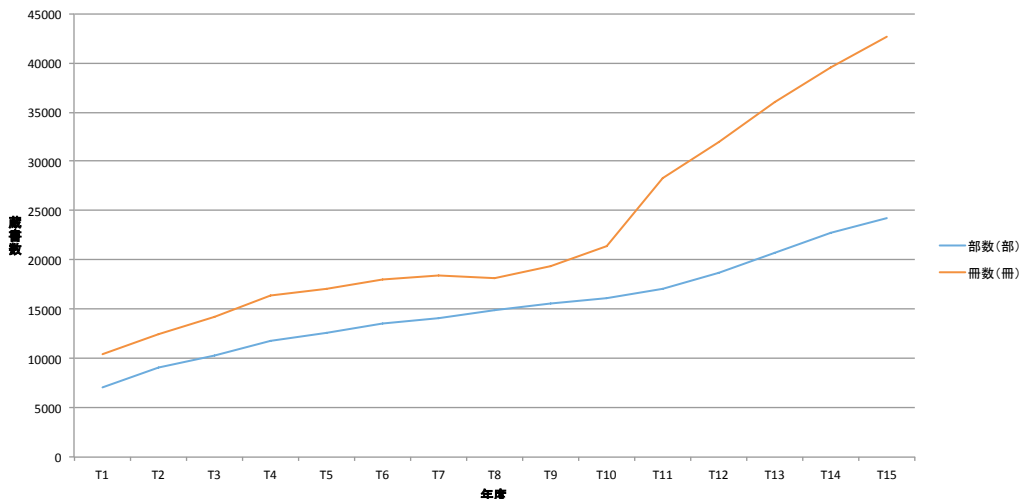
年度(明治)	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
図書冊数	286	518	539	550	939	944	971	1042	1046	1048
和漢書	276	479	498	509	898	903	920	991	995	997
洋書	10	39	41	41	41	41	51	51	51	51

私立根占書籍館蔵書数
(明治35-44年)



年度(大正)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
部数(部)	7072	9140	10277	11860	12585	13489	14110	14893	15581	16154	17073	18656	20691	22729	24257
冊数(冊)	10410	12487	14242	16371	17115	18069	18403	18130	19380	21379	28240	31941	36033	39532	42691
図書費(円)	1500	1500	1500	1936	1000	1500	2000	2200	2200	2200	3000	6000	8100	8000	7000

大正期の県立図書館蔵書数の変化



寄付金

明治33年（1900）9月4日付鹿児島新聞で、加納知事の辞職が報じられた。その後、知事の功績を記念するため、同新聞紙上に「加納文庫に付て四方同感の士に告ぐ」と題する特別広告（図版）が掲載され、義援金（寄付金）募集が始まる。寄付金の受付は2つの地元新聞社が担当している。鹿児島新聞では加納文庫寄附金と図書館寄付金について、寄付者および金額、当日の小計と通計金額を掲載した（領収書の発行を紙面掲載で代替）。

男性の寄付者が多数を占めるが、中には女性も見受けられる。また、個人のほか、団体やグループでの寄付もある。中でも小学校の職員と青年実業団体が多かった。こうして加納文庫には406円の寄付が集まった（16ページ参照）。

開館の後は「図書館費寄附者待遇内規」が設けられ、これによると、寄付者は永く教育会の記録に残し、1円以上の寄付者には謝状を送ること、10円以上の寄付者には終身無料、かつ特別閲覧人の扱いとし、謝状と木盃が贈呈されることになっている（鹿児島新聞、明治35年7月6日）。（景）



「鹿児島新聞」明治33年9月26日付「特別広告」
（鹿児島県立図書館蔵）

図書館と書籍商

図書館と書籍商は切っても切れない関係があるのは言うまでもない。教育会附属図書館の母体である教育会は学校関係者の組織であり、学校の教科書や文具全般の納入、教科書や副読本の作成にも早くから書籍商が関与していた。

教育会附属図書館設立に当たっては、吉田幸兵衛、久永金造（金蔵）ら書店主の寄付が確認できる。また、県立図書館に納入された本には、奥付に鉛筆で価格および納入業者の記録が見られるこ

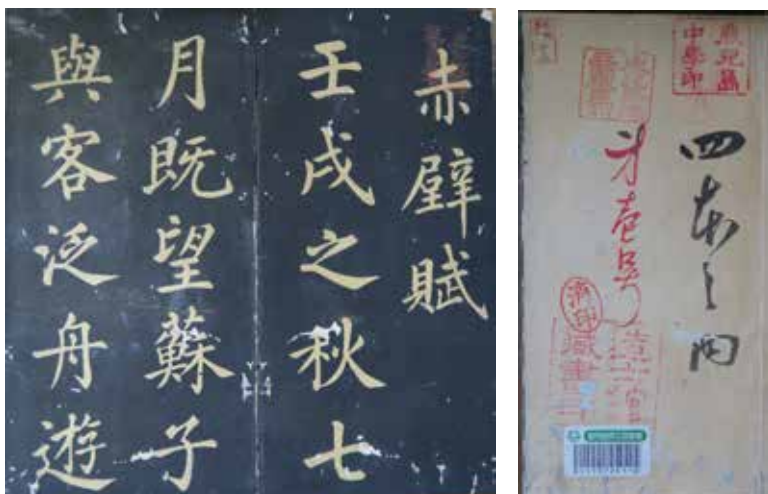
とが多い。書店は図書館や官庁・学校が多く集まっていた街の中心部にあったが、明治末期、師範学校や第二中学校などの学校が郊外（甲突川の南）に移転すると高麗町や平之町にも支店の設置（吉田書房高麗町支店）や新規出店（徳田屋書店）が見られるようになっていく。（丹羽）



勝野時太郎「鹿児島市案内」明治43年

旧制中学造士館から来た書籍

教育会附属図書館の設立にあたって、造士館の蔵書が引き継がれた。この『前赤壁賦』（蘇東坡作）もそのひとつ。現在、鹿児島県立図書館に残る中学造士館旧蔵書は石摺（拓本の形式）の書道の手本が多い。本書は、明治14年（1881）設立の「鹿児島中学校」の旧蔵書で、高等中学校造士館に移管され、さらに教育会附属図書館に移管されたことが、蔵書印からわかる。（丹羽）



『前赤壁賦』（鹿児島県立図書館所蔵）

加納文庫

加納文庫は加納久宜^{かのうひさよし}知事（1848-1919、知事在任1894-1900）の功績を讃えて設立された文庫。設立のため集められた寄付金406円をもとに、法律・実業に関する図書とセンチュリーディクショナリーの計315冊（和漢書305冊、洋書10冊）を購入し、教育会附属図書館に附設された（『私立鹿児島図書館概報』1910年）。右下の写真は私立教育会附属図書館の前景だが左の門柱に「加納文庫」の看板が見える。左下の図版は加納文庫の一冊『経済政策』（1897年刊）で明治36年（1903）3月11日の領収印があり、登録番号は「加二一」である。『近世社会主義評論』（加九）、『果樹栽培全書』（加一五）、『海運』（加二二）、『会社設立案内』（加二三）、『硝子製造法』（加二三九）など勸業知事の業績を記念するにふさわしい書籍が多い。受け入れ印から、これらは明治35年から36年にかけて整備されていったことがわかる。（丹羽）



『経済政策』（鹿児島県立図書館蔵）



『ふるさとの思い出写真集 鹿児島』（国書刊行会）より

寄付する人々（1）

私立教育会附属図書館・私立鹿児島図書館時代には、設立母体が寄付を呼びかけたこともあり、現金あるいは書籍を寄贈する人が多かった。また、書籍商（吉田幸兵衛や久永金造ら）も寄付をしているが、ここでは書籍を寄贈した主な個人を紹介する。

1. 島津久実

慶応2年（1866）鹿児島城下生まれ。花岡島津家八代当主。明治18年（1885）11月に照国神社禰宜となり、同30年3月同社宮司、33年には鹿児島県皇典講究所分所長を拜命。その後、枚聞神社宮司、鹿児島市の鶴嶺神社宮司を歴任する。教育会附属図書館開館に際して「万葉集略解」「土佐日記創見」「常山紀談」「唐鑑音註」「朱子語類大全」など国典・漢籍を寄付している。また、開館式には次の和歌二首を詠んで送っている。



島津久実♦

鹿児島県私立教育会附属図書館の開館を祝ひて 従七位 源久実

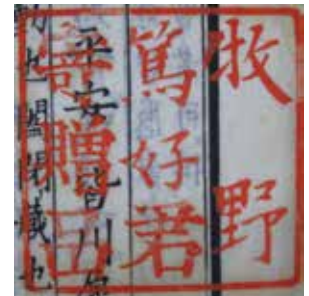
物まなぶをしへの庭につくものは この文庫のほかやなからん

文庫に文てふ文はよりくらん ひらきし今日を始めにはして

なお、国文学者で東京帝国大学教授の島津久基（1891-1948）は久実の子であり、幼時からの読書環境が久基を古典研究にむかわせたのであろう。（丹羽）

2. 牧野篤好

牧野篤好（？ - 1923）は静岡県東郡棚草村（現 菊川市）出身。号は岳陽。明治22年（1889）9月より同35年（1902）12月まで、熊毛郡（種子島と屋久島）の郡長を務めた。牧野が故郷の静岡に帰った後、同地の茶業者に種子島が茶の適地であると説き移住を勧めたことで、種子島茶業の基礎ができたという。



「牧野篤好君寄贈品」印（鬼谷子）※

牧野は故郷に帰る直前に、教育会附属図書館が開館するのに合わせ和本・漢籍・洋書152冊を寄贈（『鹿児島図書館概報』）、『王陽明先生全書』『子華子』などその一部が現存している。（丹羽）

3. 奥常次郎



奥常次郎♦

奥常次郎は弘化4年（1847）鹿児島易居町生まれ、明治22年に市議員に当選（明治44～大正2には副議長も務める）。実業家として、鹿児島商業会議所副会頭などを歴任するとともに、私立錦城学舎幼稚園の経営にも携わった。



「故奥國彦君追悼記念図書」印※

その息子奥國彦は、病気で明治43年（1910）12月13日に没した。國彦のちょうど半年後の命日にあたる明治44年6月13日を受入日として、鹿児島教育会附属図書館に、「故奥國彦君追悼記念図書」が寄贈された。寄贈図書は経済・商業関係のものが中心となっている。青年実業家として期待していた息子を追悼するためであったと考えられる。（周）

♦『鹿児島県紳士録附淑女録』より ※鹿児島県立図書館蔵

鹿児島県における巡回文庫の始まり

巡回文庫は、図書館に来館が難しい地域の施設等に、図書のセットを貸し出すサービスである。日本で始めて実施されたのは明治35年（1902）、秋田県立図書館においてで佐野友三郎が米国の図書館の方式を参考に開始した。ついで、佐野の異動した山口県立図書館でも、明治37年（1904）から実施されるようになった。

これまで、鹿児島県での巡回文庫の開始は鹿児島県立図書館での明治45年（1912）の巡回文庫規定の制定に始まるとされていた（『九州図書館史』、『鹿児島県立図書館史』）。しかしながら、『私立鹿児島図書館報』第3号に「本明治四十三年度に於て本館は規則を改正し新に巡回書庫を開始し」とあり、既に実施されて

いたことがわかる。また「巡回書庫は明治四十三年八月より実施したるものにして」と開始日時が明記されている。これを裏付けるのは、鹿児島県教育会薩摩郡部会から宮之城村教育会長宛への通牒（明治43年8月9日付）に薩摩郡内の巡回予定が記されていること（『鹿児島県教科教育実践史資料』）。さらに、「鹿児島新聞」（明治43年7月21日付）には「巡回文庫

『巡回文庫發送』一略	
第一號	自八月一日 至全末日 一ヶ月間 鹿児島郡
	自九月一日 至全末日 一ヶ月間 揖宿郡
	自十月一日 至十月三十一日 二ヶ月間 川邊郡
	自十一月一日 至一全月末日 二ヶ月間 日置郡
第一號	自八月一日 至十月末日 三ヶ月間 薩摩郡
	自十一月一日 至十二月末日 二ヶ月間 出水郡
	自一月一日 至 末日 一ヶ月間 伊佐郡
第三號	自八月一日 至十月十日 七十一日間 始良郡
	自十月十一日 至十一月廿日 四十一日間 贈岐郡
	自十一月二十一日 至一月末日 七十一日間 肝属郡
第四號	自八月一日 至九月末日 二ヶ月間 熊毛郡
	自十月十一日 至一月末日 大島郡

「鹿児島新聞」明治43年7月21日付記事による

發送」と題して、8月1日から4号に分けて県下12郡を巡回する文庫の停留期間の記事があることである（右上の表を参照）。

私立鹿児島図書館から移管され、設立された鹿児島県立図書館においても、私立教育会附属当時の巡回書庫の成績が「佳良」であるため、引き続き実施された（『大正元年鹿児島県統計書第三編』）。上記のように地方にまだ殆ど図書館が設置されていない状況に対して、固定式編成法で順次回送する方式が取られ県下を回ったと推測される。名称や方式は、団体、施設により様々であるが、県立図書館においても形を変えながら、現在も連綿と実施されている。

公共図書館黎明期の鹿児島県にあってはとりわけ、巡回文庫は限られた冊数や日数ではあっても、小さな図書館を県下に届けるという重要な役割を担っていたと言えるだろう。（濱田）



『鹿児島県立図書館報』第七より
（鹿児島県立図書館蔵）

第三部

鹿児島県立図書館の成立

明治45年（1912）4月、私立鹿児島図書館が県に移管され、鹿児島県立図書館が開館した。鹿児島図書館から移管された蔵書約14000冊には、右の図版のような寄贈印が押された。

半年後の10月、初代館長の片山信太郎が東京から着任する。年号が改まり、大正2年5月には、第一中学校跡地に移転するが、移転して半年あまり経った大正3年（1914）1月12日、桜島が大噴火を起こし、図書館も大きな被害を受けた。館内閲覧が困難になったことをきっかけとして、館外貸し出しが行われるようになった。また、桜島噴火の資料を後世に継承するため博物部が設けられ、上階（二階）の桜島噴火記念室・大典記念室・博物陳列室を担当した。

図書館の下階（一階）には、当初から「児童閲覧室」が設置され、大正6年（1917）に児童文庫も置かれ、また婦人用の部屋も用意されている（図版参照）。

大正デモクラシーの風潮を受け、児童教育に焦点を当てた行事として「お話し会」も開催された。

有料だった閲覧も、大正9年4月には無料となり、巡回文庫や通俗図書目録の選定など、一般向けの活動が行われていった。そのため、貸出数・閲覧者数ともに大きく伸長することとなった。

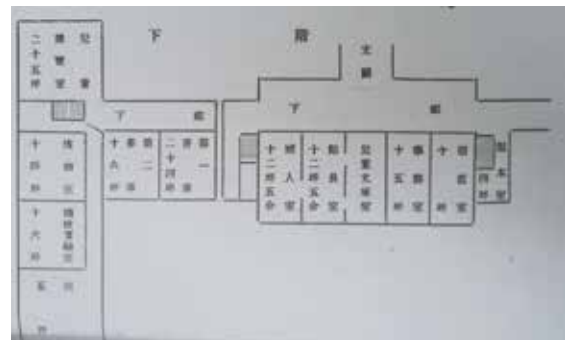
（丹羽）



「明治四十五年四月二日」印
（鹿児島県立図書館蔵）



『ふるさとの思い出写真集 鹿児島』（国書刊行会）より（左上）



『鹿児島県立図書館報』第四より（右）
（鹿児島県立図書館蔵）

図書の受け入れ

鹿児島県私立教育会附属図書館



『欧米歴遊日誌』

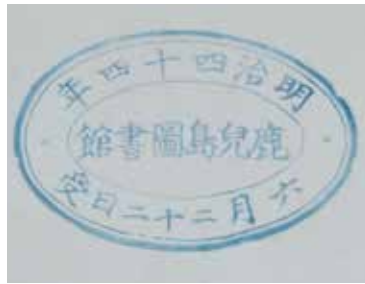


登録番号の印の中に漢数字で朱筆を書き入れ「明治〇年〇月〇日領収」の印を捺し、墨で年月日を書き入れる。

私立鹿児島図書館



『小学校に於ける軍人精神の鼓吹』

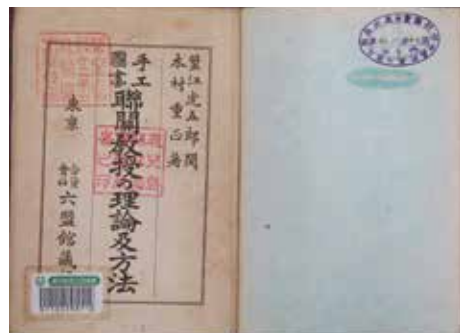


登録番号の形式は教育会附属図書館に準じ、「明治〇〇年〇月〇日受」の楕円形式受入印（水色ないし紫）を捺す。

鹿児島県立図書館



『社会問題と植民問題』



『手工図画聯関教授の理論及方法』



受け入れ番号はアラビア数字。
受け入れ印は円形で巻末に捺される。

※登録印は全て鹿児島県立図書館蔵書（丹羽）

初代館長 片山信太郎



片山信太郎（長崎県立長崎図書館蔵）

片山信太郎（?-1922）は、加賀前田家に使える儒者の家に生まれ、第四高等学校を経て、京都帝国大学図書館、東京市日比谷図書館に勤務、大正元年（1912）10月28日、鹿児島県立図書館長となり、鹿児島に赴任した。

大正2年（1913）には県立第一中学校跡地（現在の鹿児島県民交流センター）への移転、大正3年1月12日の桜島大噴火への対応と附属機関として噴火資料や動植物標本を展示する博物部の設置、大正天皇の大典記念事業、さらには日本図書館協会九州支部総会の県立図書館での開催（大正6年11月）など、中央や九州の図書館関係者と連携をとりながら草創期の図書館事業を主導した。

片山の業績のうち、蔵書の充実を図ったこと、中でも鹿児島の郷土史家たちと連携し、「郷土資料」の収集に尽力したこ

とは記憶されるべきである。

片山館長は、郷土史料のうち、特に薩摩藩版の収集に力を入れ、自身「薩摩版に就きて」を『図書館雑誌』（25号・26号）に発表している。現在鹿児島県立図書館に残る『南山俗語考』（文化9刊）、『孝経』（天保13刊）、『遠西奇器述』（嘉永7刊）、『重訂英国歩兵練法』（慶応3刊）といった藩版、古写本、書簡、薩摩藩士の絵画や墨蹟などは片山館長時代に購入されたもので、その多くは現在貴重書に指定されている。

大正10年2月に片山は大阪市立阿波座図書館長（同市西野田・御蔵跡・清水谷各図書館の館長を兼務）として鹿児島を離れる。当時の大阪には明治37年に住友家の寄付により誕生した大阪図書館（後、大阪府立図書館）に今井貫一（1870-1940）が精力的な活動を展開しており、片山も今井の影響を受けるとともに、今井のひきによって大阪に移った可能性もある。

片山の訃を伝える鹿児島新聞の記事は、彼の業績を伝えて余すところがない。

氏が任に鹿児島県の図書館長の椅子にあるや四方に散佚せる薩藩藏版の書物を始め我が薩摩藩に關涉ある書冊を縣立圖書館に收藏するを唯一の方針とし縣内は勿論、大坂、京都東京の各都市の書店を獵さり珍書を発見して購入した今現に本縣の圖書館に所藏さる、多數の薩藩刊行書は即ちそれであつて、今日の本縣圖書館の圖書がお國ものに富んで居るものは一に氏の努力の賜で我々讀書子は平素大に氏の功勞を稱へて居たが今氏の訃に接し其の長逝を悼惜せざるを得ない

（丹羽）



片山信太郎「薩摩版に就きて」（『図書館雑誌』25号）

寄付する人々（2）

1. 牧野伸顕

大久保利通の次男で、天皇の側近として戦前の国家体制に大きく影響力をもった牧野伸顕（1861-1949）は、若いころから文化事業へ強い関心を示した。それは文部次官時代から見られる。牧野の尽力により、明治27年（1897）年4月に帝国図書館官制が公布され、東京図書館は日本初の国立図書館となる帝国図書館と改称された。文部大臣（1906年7月-1908年7月）に就任した牧野は、教育事業に積極的に携わり、義務教育年限の延長（4年から6年）を実現させた。

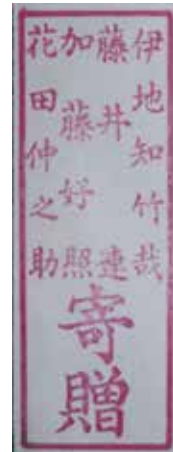
大正3年（1914）、牧野は故郷の鹿児島県立図書館に対して、教育、経済、法律、歴史等幅広い分野の本を寄贈した。寄贈書は、『学校教育』『学習法』『我国の養育』といった教育関係の本が中心になっている。（周）



牧野伸顕
（『三州名士録大鑑』より）

2. 伊地知竹哉・藤井連・加藤好照・花田仲之助

この4名は連名で、大正6年12月28日、7年3月14日に書籍を寄贈している（『孫子詳解』『田園都市』『独立自営』『破壊思想』『英雄論』など）。この4名の関係や寄付をした経緯などは不明。伊地知と藤井は経歴も不詳である。花田仲之助（1860 - 1945）は、旧薩摩藩の医師の家に生まれ、陸軍入りし、日清・日露の両戦争に出征、明治29年（1896）2月に参謀本部出仕、特殊任務を帯びて僧侶の姿となりシベリアで諜報活動に従事する。明治34年、日常道徳の実践活動の普及を目指して報徳会を組織し、また会文舎を設立。在郷軍人の中心人物として重きをなした。加藤好照は、明治30年に東京帝大医科大学を卒業後、鹿児島市立鹿児島病院内科医長、同32年鹿児島市山下町に内科専門医院開業、さらに38年、結核療養所「海濱院」を郡元村に開院。いずれも社会奉仕活動に熱心な人々であった。



伊地知竹哉他
3名寄贈印*



花田仲之助♦



加藤好照♦

上記のほか、鹿児島県立第一中学校の教諭、樋渡清廉（号、海門）や鹿児島県社会教育主事加治屋哲らが寄贈を行っている。また、大山柏（大山巖の長男、考古学者）が大正5年の帰省の記念として『考古精説』を寄付している。（丹羽）

—購求・寄贈・保轉—

書物の集積する方法として、購入（購求）・寄贈の他に、県の別の機関の書籍を移管する方法がある。広義の寄贈とも言えるが、県立図書館ではこれを「保轉」（「保管轉換」の略）と呼んでいた。保轉の例としては、大正2年～3年の鹿児島県立第二鹿児島中学校（現、甲南高等学校）、昭和3年の鹿児島県小学校検定委員会からのものがある。また、寄贈で珍しいのは『鎌倉時代通俗史談』で、鹿児島監獄の教陶所にあった本である。（丹羽）

♦『鹿児島県紳士録附淑女録』より ※鹿児島県立図書館蔵

大正天皇即位と図書館

明治天皇崩御（明治45年7月30日）に引き続き、昭憲皇太后が大正3年4月10日に崩御、^{りょうあん}諒闇（喪に服する期間）が続き、大正天皇の即位式（御大礼）の行事はようやく大正4年11月に京都を中心として行われるに至った。諒闇の時間が長く続いた分、天皇即位の奉祝は国、県市町村を挙げて華々しく行われた。それは奉祝の儀式を初めとして旗行列・提灯行列・神社参拝、運動会・相撲大会・講話会の開催、記念樹、植林（桜、杉、檜など）、果樹栽培、青年団・婦人会の設立、記念碑建立、郵便貯金にまで及ぶ。

図書館も天皇即位という慶事に合わせて積極的な事業を展開する。九州では大正3年（1914）11月に佐賀図書館において九州図書館連合会を設立、翌年に熊本へ全国図書館大会の誘致することを決定した。熊本における第十回全国図書館大会では「大典奉祝の意を發表すること」が決議された。以前から図書館設立の気運が高まっていたが、長崎県立長崎図書館、宮崎県立図書館、福岡県立図書館が相次いで建設されている（東條文規『図書館の政治学』青弓社）。



大典記念室（『鹿児島県立図書館報 第一』1915年）

福岡県立図書館が相次いで建設されている（東條文規『図書館の政治学』青弓社）。

鹿児島県下で、図書館および教育機関で即位の奉祝事業がどのように行われたかを確認してみよう。

まず、県立図書館では寄付金1200円を基に「皇室ニ関スル図書ヲ購入シ特別ナル記念文庫」を図書館二階の「大典記念室」（20坪）に置いた（図版）。大典記念室には、京都島津製作所に150円で発注した即位式模型を中央に置き、周囲の書架には、皇室関係図書を並べた（図版）。

図書数は288部、604冊（図書経費は936円）であった。

七高では生徒及び職員の寄付を募り、専門書を購入、師範学校でも記念文庫が設置された。その他、各地の学校教育会で、図書の購入や図書館設置、あるいは図書館設置のための準備を行うことが多く見られた（次頁表参照）。

大典記念文庫目録（『鹿児島県立図書館報 第一』1915年）



大礼記念文庫印
（『昭憲皇太后御一代記』
鹿児島県立図書館蔵）

機 関	事 項
鹿 児 島 県 立 図 書 館	大典記念室・大典記念文庫設置。
第 七 高 等 学 校 造 士 館	職員・生徒の献金によって図書を購入。大正初期の学会の参考書を選定。経費約500円。
鹿 児 島 県 師 範 学 校	寄宿舎の図書室内に御即位記念文庫を設置し、大典・皇室・国家に関する書籍を収集。経費約200円。 附属小学校に御大典記念図書室を設置。経費約200円。
第 二 鹿 児 島 中 学 校	図書閲覧室を拡張し皇室関係の書籍や忠君愛国を養う書籍を購入。
鹿 児 島 市 立 商 業 学 校	商業に関する高価な辞書を購入し、これを基礎として将来図書館を建設する。経費100円。
清 水 尋 常 小 学 校	父兄・職員の寄付をもって学級文庫を設け、四年以上の各学級に児童相応の課外読み物を設置する。
中 洲 尋 常 小 学 校	児童文庫を設置。
揖 宿 郡 教 育 部 会	通俗図書館設置（7月1日）。巡回文庫に郡内小学校（教員文庫）・青年会（青年会文庫）に送致。
始 良 郡 教 育 会	記念教育館の設置。郡役所に32坪余の二階建記念教育館を建設、参考書類・博物標本類を収集、通俗的書籍を備える。巡回文庫附設。
始 良 郡 吉 松 尋 常 小 学 校	児童文庫設置。
川 辺 郡 加 世 田 尋 常 小 学 校	空き室に尋常五年以上の児童を対象として通俗図書館を設置。
伊 佐 郡 菱 刈 尋 常 小 学 校	学校地を開墾して茶園を開き収益を児童図書館費に充てる。
嚙 唼 郡 部 会	教員文庫を設けて、郡内四つの地域に巡回、閲覧させる。
肝 屬 郡 役 所	郡役所内に図書室を設置。年間経費200円。
肝 屬 郡 鹿 屋 男 子 尋 常 高 等 小 学 校	児童図書室の設置。年間経費60円。
鹿 児 島 郡 谷 山 男 子 尋 常 高 等 小 学 校	記念文庫の設立。児童の自習用読み物、辞書類の収集。中等学校以上の参考書の収集。一般村民向けに通俗的読み物の設置。
日 置 郡 田 布 施 尋 常 高 等 小 学 校	巡回文庫
照 島 尋 常 小 学 校	児童文庫の設置。
薩 摩 郡 部 会	記念教員巡回文庫を開始。大正5年より毎年300円を積立てることを予算に計上するよう郡長に建議。
薩 摩 郡 隈 之 城 尋 常 高 等 小 学 校	記念陳列所設置、地理教材（写真・絵葉書・地図・物産）を収集。
熊 毛 郡	図書館設置。郡会より50円を補助。
北 種 子 村 榕 城 尋 常 高 等 小 学 校	郡会が図書館設置を可決したことを受け、講堂を以て当面図書館とし、11月10日より村内各学校へ巡回文庫を開始。
大 島 郡 田 検 尋 常 高 等 小 学 校	児童図書館の設置。

◆鹿児島県下教育機関の大正大典記念事業（『甕島教育』第265号 御大禮記念号に基づき作成）

（丹羽）

郷土史料の充実

片山館長時代には一般書に加え、郷土史料の充実が行われた。購入によるものは前に述べた。ここでは転写による資料収集について見てみよう。

県立図書館の郷土資料コーナー（開架）に足を運ぶと、洋装本の間には紺色の布表紙の和装本が配架されていることに気づくだろう。これらの資料は、昭和50年（1975）前後に作成された複製本である（複製本の元になっている写本・刊本は、筆写が近代の新しいものでも、掛軸や浮世絵、古文書などと同様、貴重書として大切に保管されている）。

では、これら複製本の元になっている資料はいつ県立図書館に入ったのだろうか。それはそれぞれの本に捺された受入印によって知ることができる。

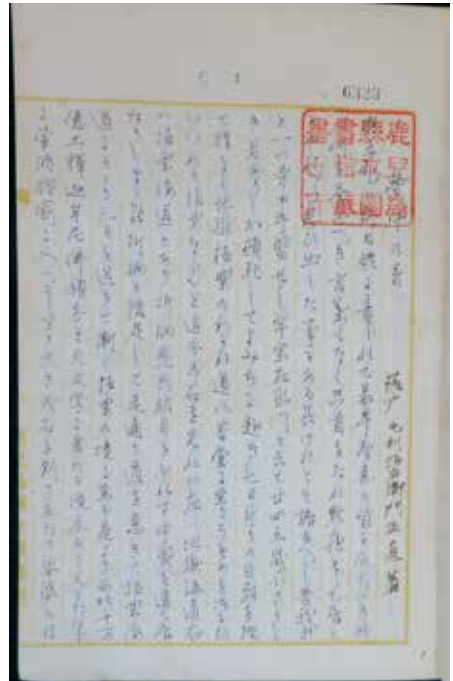
たとえば、図版は薩摩の滑稽本『夢中の夢』だが、この本は受入印から「大正6年2月26日」に「購求」されたことがわかる。こうした写本の郷土資料の多くは大正から昭和初期にかけて集中的に作成されたのであり、片山館長時代に定着した方式があったと思われる。写本に残された受入印や書入れからこれを推測してみよう。

写し取るべき本があるとする。それを所蔵者から借り出し、筆耕に写させる（墨筆の場合とペン書の場合がある）。多くの場合県立図書館専用の罫紙を用いる。筆耕料は罫紙の場合一枚（2ページ）で3銭程度であり、枚数に応じて支払われた。図書館は筆耕者とある種の売買を行う形で品物（写本）を買い上げた（購求した）。そして、これを帳簿および目録（カード）に登録、本を書庫に配架し利用者の閲覧に供した。こうして図書館の郷土資料は1点ずつ増えていくことになる。

筆写が終了すると原本はもとの持ち主に返却される。当時は写本の由緒来歴を記録することを重視しなかった。そのため当該本がどこに所蔵されていたのか不明な場合がほとんどである。

『小根占名勝志』が大正9年2月17日に筆写（購求）された。その原本は根占の役所などに保管されていたものであろうが、現在その原本の所在は不明である。昭和49年（1974）に『根占郷土誌』の付録として「小根占名勝志」が刊行されたが、その底本に使われたのは鹿児島県立図書館のペン書きの写本であった。原本が失われてしまった資料であれば、筆写本の意義はよりいっそう高くなる。

郷土資料の充実ぶりは、大正5年、同11年、同15年、昭和7年など数年おきに刊行された郷土志料目録から見て取ることができる。（丹羽）



『夢中の夢』鹿児島県立図書館蔵



『夢中の夢』の受入印



鹿児島県立図書館『郷土志料目録』

観光集 卷七

会津藩士^{あきづきていじろうかずひさ}秋月悌次郎胤永（号は章軒、1824-1900）は、藩校日新館に学び、19歳で江戸の昌平^{しょうへい}館に入り、舎長を務め諸国の学生と交流した。藩命により安政6年（1859）から翌万延元年にかけて、東海道・近畿・西日本の諸国を遊歴して、見聞した各藩の政治・経済、風俗、気質などを取りまとめて『観光集』8巻を著し、会津藩庁に提出した。藩主松平容保^{まつだいらかたもり}が京都守護職となると、京都に上り、戊辰戦争では会津、越後で奮戦したが、戦後は終身禁固に処せられる。明治5年（1872）特赦となり、政府に仕え、東京大学、熊本高等学校などの教授を歴任した。

本書巻7は、薩摩と琉球を対象とした報告で、幕末期の薩摩藩の諸制度や実態を把握する資料として極めて有益な資料である。また、秋月の卓越した情報収集能力と文章力を看取することができる。たとえば、「学制」についての記述を見てみよう。

学問所ハ造士館ト号ス、武術稽古所モコノ内ニアリ。……（中略）……学事教職ソノ人ハニ因リテ命ズ。家柄ニアラズ。武術の師範ハ大抵家柄アリト云。寄宿ノ寮アリ。陪臣マデモ入学スルコトヲ得。助教交番シテ寮頭ヲ勤ム。寮生皆自分賄ニシテ官コレヲ給スルコト無シ。郷士城下遠ノ者又ハ陪臣ノ類、常ニ多ク寮ニアリト云。

同じく、藩外へ留学する者についての記述——

他国遊学生、造士館書生中ヨリ択ミ取ル。学費一ヶ月金一両二分、米四斗五升ツ、ヲ賜フ。但シ遊学生、政府ヨリ命ズルアリ、学問所ヨリ命ズルアリ、ソノ人ニ因リテ命ジ、一様ナラズ、政府ヨリ命ズルハ子細アル事ト聞ユ。

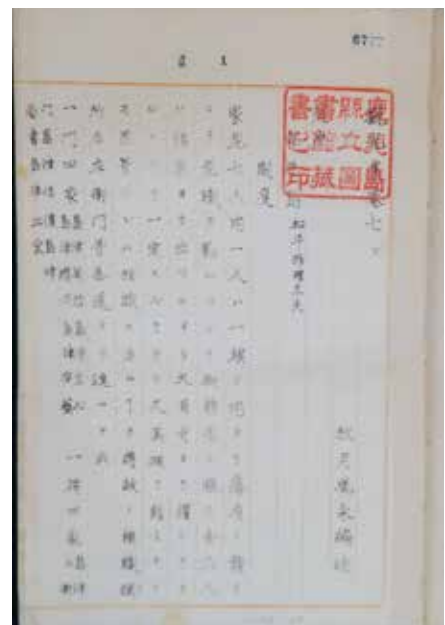
「田制」のうち庄屋に関する記述——

庄屋職ハ皆士分ニ命ズ、城下近在二十四ヶ村ハ城下ノ平士ノ内ヨリ勤ム、勤仕ハヶ年ヲ限ル、ソノ人貞実ニシテ人心服スレバ村中ヨリ延年ヲ願ヒ出、又ハヶ年勤ムルモアリ、庄屋ハ扶持米・地方共アリテ勤中利潤多シ。……

本書は伝本が極めて少なく、現在確認できるのは8巻のうち、巻1・2・5・7・8の5巻分に過ぎない（小林修『南摩羽峰と幕末維新期の文人論考』2017年）。

鹿児島県立図書館には、巻7のみ存。「大正6年（1917）7月15日購求」の印があり、県立図書館の野紙（13行）にペンで書かれている。秋月は鹿児島に滞在したので、薩摩藩士の家に写本が伝わり、そこから転写された可能性もな^{しんむら}くはないが、京都帝国大学教授で『広辞苑』で名高い新村^{いづる}出の蔵書（重山文庫）中に巻1、2、7が所蔵されている（小林前掲書）。この本は大正天皇の即位を記念して京都帝国大学で開催された展覧会に出品されており、片山館長が旧知の間柄である新村に頼んで写させてもらった可能性があるのではないか。

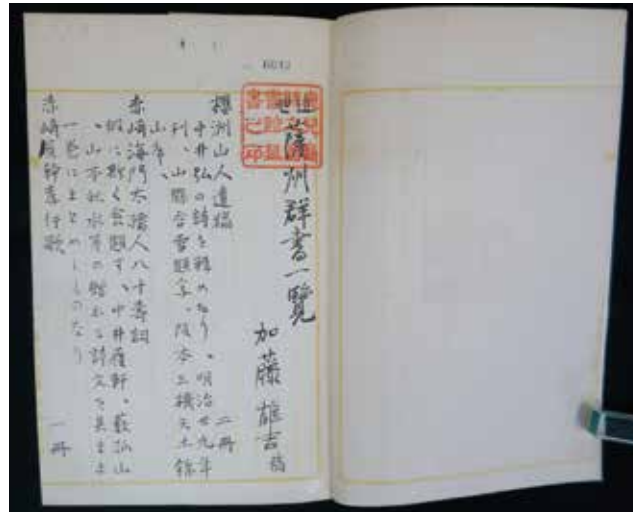
なお、東京大学史料編纂所の島津家文書に残るのは大正11年に尾島藤吉によって、鹿児島県立図書館のペン書きの写本から再転写されたものである。（丹羽）



『観光集』巻七冒頭部表（鹿児島県立図書館蔵）

郷土史家 加藤雄吉と坂田長愛

加藤雄吉は串木野の麓に、明治6年(1873)年加藤彦十郎の次男として生まれた。父彦十郎は西南戦争に薩軍として従軍後、自稼山から金を採掘して財をなした。雄吉は16歳で東京法学院(中央大学の前身)に学び、桂園派の流れを汲む歌人松浦辰男に入門、その門下の田山花袋や柳田國男、さらには森鷗外、国木田独歩、斎藤緑雨らと交流をもった。中でも、柳田國男の兄の井上通泰の影響を受け、民俗学や郷土史へと目を開かれていく。明治33年(1900)、串木野のはずれ^{はしま}羽島に引き込むが、同38年、



『近世薩州群書一覽』(加藤雄吉自筆、鹿児島県立図書館蔵)

鹿児島市に居を移し、本格的に鹿児島県に関わる古文獻を博搜、郷土史や郷土の人物についての文章を発表していく。歌文集『尾花集』(尾花は雄吉の号)、『近世薩州群書一覽』『日当山侏儒戲言』、未刊行ながら重要な編著に『薩州名家伝』『薩州歌人伝遺稿』『串木野村史資料』(大正6年)があり、今も資料的価値を失っていない。大正7年(1918)1月10日、食道癌のため死去。『鹿児島県立図書館報 第一』は大正4年の事業のひとつ、郷土志料編纂について、

……第七高等学校教授武藤長平氏及本縣ノ文獻學ニ熱心ナル加藤雄吉氏ノ厚意ニ依リ好材料ヲ得タルガ爲メニ層研究者ノ興味ヲ深カラシムルコトヲ得ルハ感謝ノ次第ナリと述べる。加藤の図書館における役割の大きさを物語るものである。(丹羽)

坂田長愛(号は温古堂主人)は、肝属郡小根占(現、南大隅町)の出身。鹿児島尋常師範学校を卒業後、小学校の教諭、訓導、校長を経て、高等師範学校に入り、鹿児島県立第二中学校訓導を務める。二中を病気で退職した後は、東京の島津家編輯所に勤務し、編纂事業に携わる。坂田は資料の収集、筆写だけでなく、まさに編纂を行い、その筆写本やカーボン紙で謄写された写本が多く県立図書館に残る。



『薩摩名家歌集』第六編(鹿児島大学附属図書館蔵)

鹿児島大学附属図書館所蔵『薩摩名家歌集』(図版)は第5編から10編のみ現存の写本であるが、これも坂田の収集・筆録した写本のひとつで、「斉彬公御詠草」「新納忠元歌集」「小松清廉歌集」等、薩摩藩ゆかりの歌人たちの詠歌を根気よく集め、丹念に筆録している。(丹羽)

ブックスト小出満二

小出満二（1879 - 1955）は鹿児島高等農林学校教授を、大正3年（1914）から同10年（1921）まで務め、その後文部省督学官、九州帝国大学農学部教授、鹿児島高等農林学校長、東京高等農林学校長（東京農工大の前身）などを歴任した。

小出は晩年の昭和29年（1954）9月、盟友の谷口熊之助に宛てた手紙のなかで自己の人生を振り返り、次のように述べている。



小出満二

貧乏といふよりも餘裕ない生活でした。餘分の収入は旅費と書物代となりました、それには惜しみながらも使ひ果たして遺憾はないわけですが、一つ小さな住宅ぐらゐは出来てゐた筈です、好んで轉々したわけではなく、いつも移った所に墓をつくる積りでゐながら可なり轉々したのです、心掛が足りぬのです、書物だけが荷物ですが、それを最後となって持餘して弱つてゐるのです、妙な不始末な生涯でした。

小出は農業経済、農業史の専門家であったが、その一方で、蔵書家として知られていた。教え子の石橋幸雄によれば、その蔵書は、「和本の古農書の主なものはほとんど集め」られており、「明治以降の洋装の書籍になると農学関係はもとより、歴史、社会、伝記、地誌、民俗、文学にわたって多種多様の著書が集められていて、先生の草舎は書籍で埋まっているような有様であった。先生はそれらの書籍をいつも読んでおられた。」（『小出満二先生の学問と思想と人柄』『小出満二著作集』所収）という。

大正6年（1917）11月、第3回日本図書館協会九州支部総会が鹿児島県立図書館で開かれた際（この年は戊辰戦争五十年祭の記念の年であった）には、高等農林学校で書籍の展示が行われたが、展覧書籍の大半は小出の個人蔵書であったと推定される。

大正7年（1918）2月から同9年3月までオーストラリアのシドニー大学に交換教授として滞在、シドニーの古書店を回り、オセアニアおよび南方関係の洋書を自身で購入するとともに、北村寅之助の援助を受けて買い集め、716冊を勤務校の図書館に送った。小出・北村の一字ずつを冠した「小北文庫」として鹿児島大学附属図書館に保管されている。

九州帝国大学教授時代にも、昭和9年（1934）11月2日～4日、福岡日日新聞社大講堂で開催された「全国図書祭記念大展覽会」に『民家検労』（江戸後期の加賀国の彩色農書）『南島雑話』（四冊本、奄美の地誌）ほかを出品している（山根泰志「全国図書祭記念大展覽会と九州大学」）。

小出の癖として、版本・写本を複数集めているが、写本を転写して（させて）一つは自身に、もう一つは職場の図書館に置いた。珍しい写本を見出すと、自身書写するとともに製本も自ら行った。『南島雑話』は大正5年に鹿児島高等農林学校図書館に納めている（五巻五冊）が、手許にあったもう一本を福岡で展示に供したことは明らかである。（丹羽）

鹿児島県立図書館と島津家臨時編輯所

鹿児島県立図書館に『薩陶製蒐録』という薩摩焼関係史料集の写本がある。巻末の記載によれば本書は、薩摩焼の由来・沿革に関する記録を借用したいと帝室博物館から連絡があったため、島津家本家庶務部の計らいで明治33年（1900）に取りまとめられた。

それから20年以上が経った大正15年（1926）、当時島津家臨時編輯所の所員だった坂田長愛が、史料調査のため東京から鹿児島にやって来た。その出張の日々を記した『坂田長愛史料探訪日誌』（東京大学史料編纂所蔵）の6月4日条に、次のような記述がある。

（前略）帰途県立図書館に立寄り館長奥田啓市氏に面会し、薩陶製蒐録及調所笑左衛門書翰壹通、五代友厚書翰壹通の三品を借用し、更に川島元次郎の南国史話を借覧して帰りたり。

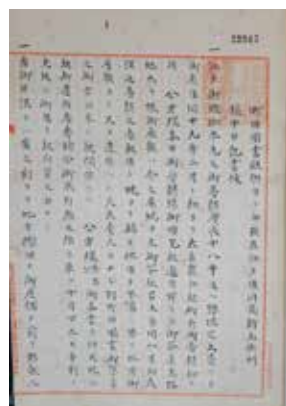
このとき坂田が借用した『薩陶製蒐録』は、現在鹿児島県立図書館にある前述の『薩陶製蒐録』とみてよかろう。そして、借り受けたその本を島津家のほうで書写して作成したとみられる『薩陶製蒐録』が、東京大学史料編纂所蔵「島津家本」のなかにある。こうした史料伝来の経緯からは、図書館のもつ史料収集機能や、図書館と史料編纂機関の相補い合う関係を知ることができる。（金井）



『薩陶製蒐録』（鹿児島県立図書館蔵）

玉里文庫と県立図書館

鹿児島県立図書館には玉里島津家の旧蔵本である玉里文庫蔵本（現在は鹿児島大学附属図書館蔵）の写しが多数所蔵されている。県立図書館のOPACで「玉里文庫」でキーワード検索をかけると、目録や論文の外に113点239冊にもものぼる玉里文庫の複写が出てくる。これらのほとんどは、昭和51年（1976）ごろに県立図書館に入ったものである。天の部5番仁・義・礼・智・信箱の古記録類、地の部の島津久光自筆本の一部（「薩隅日鉄砲鍛冶襖伝」「歌集」「詩稿」など）、その他、本草・蘭学関係書や軍記などである。これとは別に昭和4～5年（1929～1930）ごろから戦中にかけて、毛筆による筆写本が作成されて県立図書館に配架された。そのひとつが「町田図書与力川島新左衛門旅中日記」（天の部5仁箱81番）で、中央に「鹿児島県立図書館蔵書」と印刷された郷土志料謄写用の野紙に丁寧に筆写して二つ折にして製本されており、末尾には「原本玉里公爵島津家所蔵 昭和四年三月 河野通久写」との識語が見える（受入印は「昭和五年二月十八日購入」）。河野通久は玉里島津家の鹿児島出張所詰の役人。それまでは関係者以外に公開されていなかった玉里文庫が、一部であり転写本の形はあるが、公開された意義は大きかった。（丹羽）



『町田図書与力川島新左衛門旅中日記』（鹿児島県立図書館蔵）



同左（識語）

蔵書印

鹿児島県私立教育会附属図書館、加納文庫、鹿児島図書館、鹿児島県立図書館の主な蔵書印を紹介する（印はすべて鹿児島県立図書館蔵本より採集）。



「鹿児島県私立教育会附属図書館之印」



「加納文庫之印」



「鹿児島図書館」明治44年の改称後、翌年にかけて極短い期間使用された。



「鹿児島県立図書館」県立図書館極初期に使用



「鹿児島県立図書館蔵書之印」大正前期受け入れのものに多く押されている。



「鹿児島県立図書館章」図版の切り取りなどの防止のために捺された印

第四部

図書館の「通俗」化と「郷土史料」



大正期には全国各地に図書館が設置されていった。鹿児島県内の設置状況を見ると、大正元年（1912）には鹿児島県立図書館を除いては根占書籍館がほぼ唯一の図書館であったものが、大正5年（1916）には14館、同9年（1920）には17館、昭和3年（1928）には104館、昭和14年（1939）には118館となっている（『鹿児島県統計書』）。規模や蔵書の質はともあれ、大正9年から昭和3年までの8年間で6倍にも増えている。これは皇太子（後の昭和天皇）と久邇宮良子女王との成婚記念として図書館が設立されたこと、図書館設置を奨励する県訓令や図書費の補助をうたう県令（いずれも大正13年1月24日）が出されたことなどが原因と考えられている。

県立図書館では、大正末から昭和にかけて教育会が主催する夏期大学や冬期大学などに出張図書館を開設したり、図書館講習会を実施したり、巡回文庫の整備や目録の作成などにも力を入れ、「通俗教育」に力を傾注していった。

大正11年（1922）から昭和5年（1930）にかけて県立図書館が発行した『通俗図書選択目録』という7冊のパンフレット（図版）がある。ここには、「読書に生きる人は最も強し」「五分間の読書も十年の用を成す」という標語を表紙に掲げている。目録は、「町村立図書館及青年団処女会等の各種団体の文庫に備附くべき基本図書選定」のために発行されているのだが、選定の基準は「比較的平易にして利用多しと認めたる通俗図書」（傍点引用者）であり、「往々高尚に失するものも収載」しているのだという。たとえば文学部門には芥川龍之介の作品なども挙がっており、「通俗」の語をどの程度の意味に取るかは難しいけれども、図書館が先端的な〈知〉を地域の「読書に志ある者」に供給してゆく場から、より広い範囲の人々が〈知〉を共有する場へと変貌してゆく過程を見ることはできるだろう。

今でこそ「通俗」という言葉はあまり良い意味では使われていないが、本来「俗ニ通ズ」ることは、世情観察の精細さ、あるいは広く人心を掌握する重要な営為であった。大正後期以降の図書館は、この「通俗」という考え方と、明治から大正にかけて育んだ、啓蒙と教化、あるいは郷土史の充実という運動とのほざまで展開していったものと見る事ができる。

昭和8年（1933）9月、図書館令が改正され、中央図書館制度が発足、鹿児島県立図書館が中央図書館に指定された。中央図書館は各府県の図書館の指導・改善を行うというもので、初等教育のみで社会に出る者が多かった当時、学校教育以外で如何にして国民の教化を図っていくかが図書館に課された課題で、中央図書館はその中心的な役割を果たすことが求められていくことになる。戦時体制に入ると思想統制や皇民化政策への負担を余儀なくされていくのであった。（丹羽・多田）



鹿児島大学附属図書館蔵

二代館長 奥田啓市—書物を蓄え、人を運ぶ—



奥田啓市（童山）
（長崎県立長崎図書館蔵）

明治16年(1883)－昭和41年(1966)。第二代鹿児島県立図書館館長。明治41年日比谷図書館(臨時雇として雇用)を経て大正4年長崎県立長崎図書館に勤務、永山時英とともに図書館運営に携わり、当時長崎病院にいた斎藤茂吉、また永見徳太郎や武藤長蔵といった長崎史談会の人々と交わった。大正10年(1921)2月3日、鹿児島県立図書館長として赴任。昭和18年(1943)まで館長を務め、同年全日本科学技術団体聯合会に勤務(昭和18年6月「図書館雑誌」)。戦後の足どりには不明な点が多いが、昭和22年(1947)までは福岡県京都郡に住み、6月に上京、再び日比谷図書館に勤務(昭和24年まで確認)。雑誌「古書タイムス」を出した日本古書協

会の理事を務めたことが、昭和27年(1952)から同37年(1962)まで確認できる(『出版年鑑』)。

斎藤茂吉は奥田宛の書簡で、「御地名所記沢山」や「志料目録一本」の礼を述べている(昭和3年5月10日・昭和7年3月30日)。「志料目録」は「西郷南洲翁と十年の役に関する図書、文書、錦絵目録」と銘打った昭和7年版『郷土志料目録』で、のち昭和9年にこれを補訂した『鹿児島県立図書館郷土志料目録』が出た。角田文衛『国分寺の研究』にも奥田への謝辞が見え、着任早々の大正11年10月に開催した八田知紀翁五十年記念展覧会などを含め、奥田は館長として、片山信太郎館長の後を引き継ぎ、郷土史料の拡充に努めたと言える。

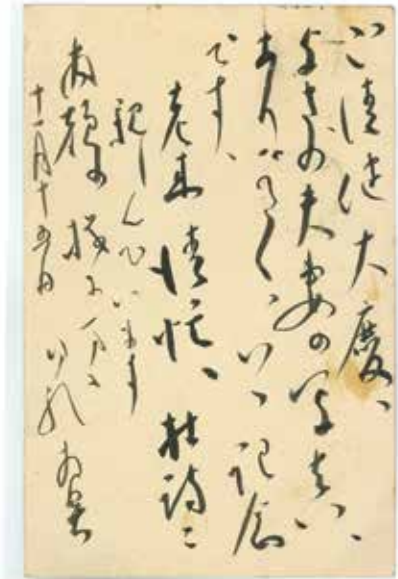
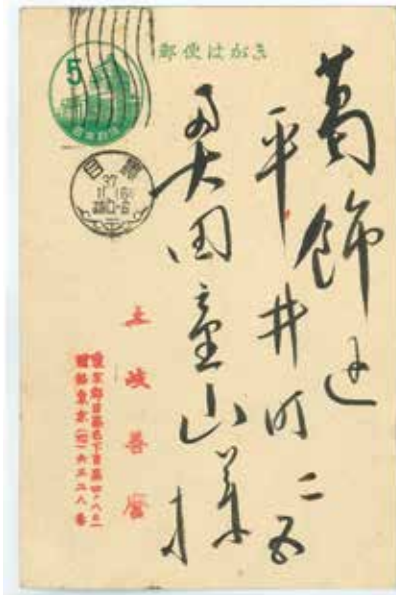
郷土史料の収集に際しては木脇藤次郎をはじめとする鹿児島史談会との協力関係があるが、その活用の際には長崎時代の人脈の力も大きかったようである。大正14年(1925)の県主催図書館講習会及協議会では長崎県立図書館長として永山時英が講師を務めており、また民俗学者の本山桂川(長崎出身)は鹿児島に奥田を訪ねて『異本薩摩風土記』の解説を受けたこと(「書誌」大正15年2月号)、長崎の郷土史学者である吉村栄吉は奥田から吉村迂斎の鹿児島における事蹟について教えられたこと(『マリノフード株式会社社史 第二編』所収昭和10年日記)を、それぞれ記している。茂吉の書簡には「武藤さんとの合作」(昭和12年8月4日)への礼状があり、長崎学の大家武藤長蔵との交流を物語っていよう。鹿児島県立図書館は長崎県立長崎図書館の目録や長崎図書館児童読物研究会編『児童用優良図書目録』(昭和3・4・12年)などを収める。

県内郷土史料の拡充と、県外との文化交流と。奥田館長時代の県立図書館には、両者の微妙なバランスを取ることが必要となった。たとえば昭和2年(1927)の新館落成は県立図書館の歴史にとって大きな出来事だったけれども、図書館ではこれによって生じた「展覧及講演室」を利用して各種の展覧会を催したほか、毎年11月の「図書館週間」を中心として講演会や童話の会などを開催し、県外から学者・文学者を招聘していた。

こうした図書館運営面での志向と関わって、奥田は館長在任中、多数の文学者招聘に関わっている。最もよく知られるのは昭和4年(1929)7月から8月の与謝野鉄幹・晶子夫妻、そして昭和17年(1942)10月の斎藤茂吉の来鹿であろう。晶子の詠草は滞在中から連日「鹿児島新聞」に掲載される一大イベントとなり、加治木で幼少期を過ごした与謝野鉄幹(寛)は鹿児島再訪によって『霧島の歌』一卷を成した。彼らの案内には改造社社長の山本實彦(→「山本實彦」)とともに奥田が関わっていたことが晶子「九州の旅」(昭和4年7月28日～9月29日「横浜貿易新報」)

によって知られる。奥田宛の土岐善麿書簡(図版)は「よさの夫妻の写真」を「いゝ記念」として喜ぶ礼状だが、この時鉄幹も晶子も既に亡いため、鹿児島旅行時の写真を贈ったのではないかと考えられる。

これより以前にも、たとえば昭和3年(1928)に来鹿した高浜虚子は後に野村泊亭・鈴鹿野風呂と連名で奥田に礼状を送っている。奥田の在任



奥田山宛土岐善麿書
(昭和37年11月15日付、個人蔵)

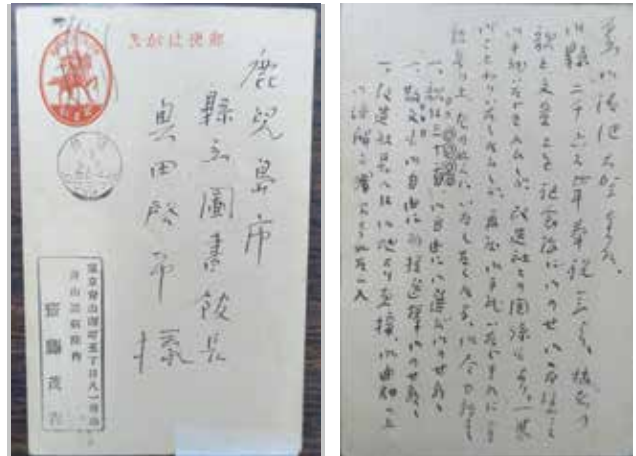
中に鹿児島を訪れた文学者は、他に久米正雄と片岡鉄兵(同道、昭和3年)、吉田絃二郎と大佛次郎(同道、昭和3年)、沖野岩三郎(昭和3年、童話の会のため)、柳田国男(昭和11年)、木下杢太郎(昭和16年)、下村湖人(昭和17年)、などなど(川内まごころ文学館第二回特別展図録『鹿児島を旅した作家たち』2005年をも参照のこと)。このうち久米・片岡と大佛次郎以外の作家は何らかの形で奥田と関わっていたことが、個々の書簡に見える。ほとんどの場合、文学者の招聘は山本の経営する改造社の広告戦略と無関係ではない。吉川英治『宮本武蔵』の新聞挿絵を描いた石井鶴三の、信州大学附属図書館石井鶴三コレクションに奥田の名刺があり、昭和14(1939)年に吉川と石坂洋次郎が来鹿した際にも奥田が関わった可能性がある。

こうした文学者との関わりは、茂吉や芥川が永見徳太郎と親しく交わる様を知り、交流史史料としての性質を強く持つ長崎文献にも触れた長崎時代の経験に基づくとところ大きいかとも思われるが、おそらく理由はそれだけではない。「鹿児島新聞」「鹿児島朝日新聞」には来鹿した文学者たちの言葉や詠草がしばしば掲出され、長く語り継がれることになる。その際、単に人脈をたどって人を招聘し案内するだけでなく、土地の伝承や文献について細部にわたる知識を教授しえた奥田の存在は、文学者と読者との交流において大きな力となっていた。奥田と文学者との関わりは、戦後の図書館が文学を中心にしてく、その下準備をなしたとも言える。奥田館長時代の図書館には、「近代」化が「通俗」化に通じてゆく時代にあって、図書館をどのように運営するか、という切実な課題が存していたのである。(多田)

齋藤茂吉と奥田啓市

齋藤茂吉は医師、歌人。歌集『赤光』以来、大歌人として、またアララギ派の総帥として歌壇・文壇に君臨した。茂吉から奥田啓市に宛てた書簡は岩波書店『茂吉全集』に76通収まる。筆まめで知られる茂吉の手紙の中でも、主だった門弟や親戚筋に次ぐ多さで、交流は長崎病院時代から晩年まで継続していた。

茂吉の鹿児島行は直接には山本實彦の招請によるものだったが、茂吉は話があった段階ですぐに奥田に霧島参詣の希望をもら



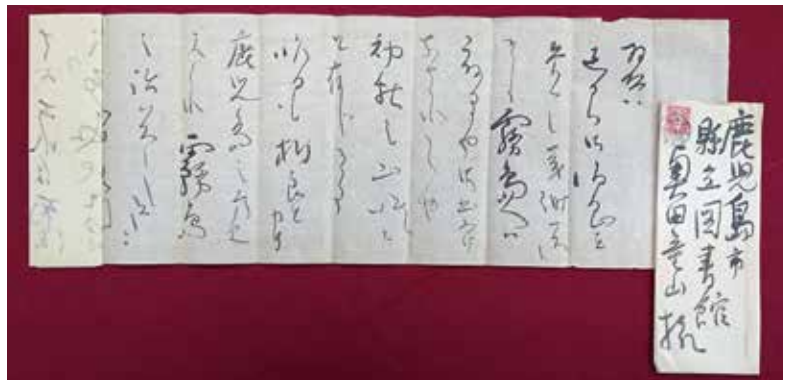
昭和15年6月8日付、奥田啓市宛齋藤茂吉書簡（長崎県立長崎図書館蔵）

している（昭和14年8月8日書簡）。書簡中「貴堂御一人の御案内の方よし」（9月8日）の語に信頼関係が窺われよう。実際の旅程でも奥田は終始茂吉と行を共にし、茂吉は奥田が捉えた後放してやった小鳥を詠む「童山の手にとらはれし朝鳥を永きえにしと吾もおもはむ」の歌を贈り、旅行後も紀行文執筆に際して奥田に細々と質問を書き送っている。茂吉の歌と文ははじめ「改造」に掲載され、昭和16年の皇紀2600年に合わせ、鹿児島県奉祝会と改造社、そして茂吉との相談によって歌集『高千穂峰』として刊行された。茂吉は少数数の記念出版的な意味を持つ『高千穂峰』の販売についても奥田に相談している。（多田）

奥田啓市宛吉田絃二郎書簡

吉田絃二郎^{よしだげんじろう}は大正12年、昭和3年、昭和4年に鹿児島を訪れた。鹿児島大学附属図書館が所蔵する奥田宛葉書18枚と封書3通（うち1通封筒欠）のうち、鹿児島行に確実に関わると考えられるものは昭和3年と4年の書簡であり、内容は旅行予定の通知や鹿児島旅行中に世話になったことへの礼状など。

吉田が改造社主催の「夏季大学」で講演した題目は「北欧文学について」。北国・金沢に縁の深い作家である吉田の眼に鹿児島の風土が新鮮に映ったさまは、吉田『わが旅の記』に記されている。橘南谿の『西遊記』などをはじめとする書籍を奥田に借り受けたことも書簡には見え、鹿児島旅行の体験を創作に活かしたいという希望を洩らしてもいた。（多田）



昭和6年10月10日付、奥田童山（啓市）宛吉田絃二郎書簡
鹿児島大学附属図書館蔵

長崎県立長崎図書館 初代館長 永山時英

長崎県立長崎図書館の初代館長永山時英は、慶応3年（1867）鹿児島東市来郷に生まれる。明治25年（1892）7月、第一高等中学校本科第一文科卒、同28年（1895）7月、帝国大学文科史学科卒、30年、鹿児島尋常中学校教諭、35年鹿児島県立川内中学校長となる。この年、薩摩郡教育会の副会長を務める。

40年、第七高等学校造士館教授となるが、大正3年（1914）病のため職場を離れる。翌大正4年8月、長崎県立長崎図書館長として赴任、死去するまで足掛け21年に亘り、館長を務める。その間、キリスト教文化に光を当て、対外史料の編纂事業を行う。なかでも『対外史料美術大観』は資料的価値が高い（図版）。

図書館関係では、全国図書館協会九州支部長を大正8年から務め、同協会の幹部として重きをなした。鹿児島との関わりについて、鹿児島教育会附属図書館設立時には、和漢書143冊を寄贈している（『鹿児島図書館概報』）。また、中学校教諭時代に依頼を受けた郷土史の編纂を、病気で閑を得たのをよき機会として東京に赴き、島津臨時編輯所の資料を調査、小牧昌業の教えを受けて『市来郷土史』（大正8年刊）を完成させた。

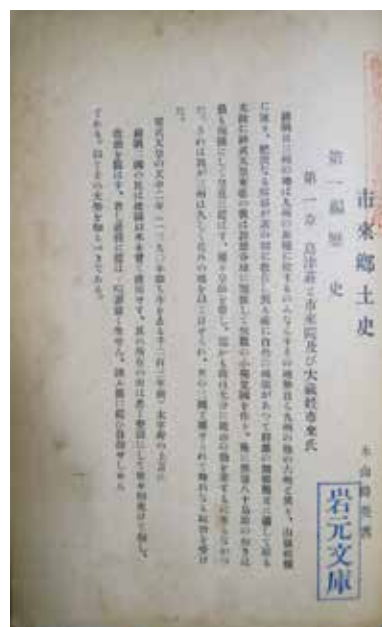
花田仲之助の興した報徳会活動にも熱心に取り組み、長崎美術協会・長崎書道会、その他社会教育・社会事業に力を尽くした。昭和10年（1935）2月6日死去。享年69。（丹羽）



永山時英（長崎県立長崎図書館蔵）



『対外史料美術大観』第一巻（鹿児島大学附属図書館蔵）



「市来郷土史」（『東西市来郷土史』所収）
（鹿児島大学附属図書館蔵）

改造社社長。明治18年(1885)鹿児島生まれ、昭和27年(1952)没。大正8年(1919)創刊の雑誌「改造」は瞬く間に「中央公論」と並ぶ代表的総合雑誌となり、戦前の論壇・文壇を牽引した。大正12年(1923)年、『現代日本文学全集』(一冊一円の、いわゆる「円本全集」)を刊行、予約出版の盛行によって文学読者層を拡大することになったと言われる。

大正末から昭和戦前期にかけての出版社は、しばしば文学者を全国に巡回させ、講演会を開いた。文学者たちの肉声を届け、交流の場を設けることで、各地域のメディアに集中する読者層を開拓しようとしたのである。このうち中央公論社の文芸講演会と並んで最も盛んに行われたのが、改造社の「夏季大学」や「文芸特別講演会」であった。

芥川龍之介以下の実に多彩な顔ぶれが加わり、伊藤整『幽鬼の街』などの佳品をも生んだこの催しは、山本の故郷である鹿児島においてとりわけ盛んに行われている。鹿児島を訪れる文学者のルートはそれまで霧島、鹿児島市内、吾平山そして山川港以西の南薩地域の周遊が定番だったのだが、この時期の作家たちはさらに山本の生地・川内を訪れることになったのである。

来訪した作家たちの顔ぶれ(p32「二代館長 奥田啓市」参照)を眺めてみると、まずは吉川英治や吉田絃二郎といった当時の「ベストセラー」作家たちが目につく。『宮本武蔵』や『鞍馬天狗』で大人気を博した吉川や大佛次郎はもちろんのこと、たとえば吉田絃二郎『小鳥の来る日』(新潮社)や石坂洋次郎『若い人』『続若い人』(改造社)は百版がそれぞれ出ており、火野葦平の『麦と兵隊』(改造社)は「二百版突破」を報じられていた(昭和13年9月28日「朝日新聞」、ただし未見)。版数が実際の売れ行きとどれほど連動しているのかは措くとしても、こうした重版に関する情報が流行作家のイメージ形成に寄与したことはたしかで、夏季大学にはこれらの作家たちが積極的に送り出されていったのである。

さらに「明星」の与謝野鉄幹晶子夫妻と「アララギ」の斎藤茂吉が、山本の世話で鹿児島を訪れていた点も注目に値する。大正昭和期における地方都市と東京・大阪との文学の結びつきは、短歌と俳句においてこそ強い。両者の来訪はもちろん政治家でもあった山本への応援の意味合いを含んでもいたのだけれども、地方歌壇を掌握した「明星」のリーダーを呼び、また旧制高校人脈を根幹に展開し戦時下の中心流派となった「アララギ」の宗匠を呼ぶことに、読者開拓上のより大きな意味があったのだと言えよう。

いずれの文学者の来鹿についても、報道は地元紙「鹿児島新聞」よりも「鹿児島朝日新聞」の方により大きく報じられている。大正末から昭和初期にかけての文学の流通範囲は現在にくらべても意外なほど狭く、地方読者の開拓は、文壇が直面する大きな難題であった。改造社などの文芸講演会は作家たちにとっても各地の風光と文献に通じる貴重な契機であったわけで、そうした接点を作るに当たって、図書館長である奥田啓市との連携が改造社の大きな力になったことはいうまでもない。山本實彦と奥田との交流は山本が公職追放となった戦後まで続いたようで、「山本實彦大人との御合作」への礼が昭和24年6月10日付茂吉書簡に見えている。(多田)



吉田絃二郎『小鳥の来る日』百版(個人蔵)

昭和2年10月22日 新図書館落成



鹿兒島新聞 昭和2年10月22日付 (鹿兒島県立図書館蔵)

『第一回現代大家新進綜合美術展覧会目録』

鹿兒島新聞社が大正12年(1923)から主催した「南国美術展覧会」の第6回(昭和3(1928)年5月5日から20日)は、従来の「県内外一般の出品」に加えて東京中央商会内綜合美術社の出品する「全国各派大家の力作」と「京都の新進作家出品の日本が数十点」を陳列することとし、鹿兒島新聞社三階ホールのほかに県立図書館を第二会場として展示した(昭和3年5月5日「鹿兒島新聞」)。県立図書館新館落成にともなう広い展示スペースが出来たことを示す例であろう。奥田が過去に勤務した長崎県立長崎図書館は、絵画や筆墨の展覧会を積極的に行ってもいた。

東京商会綜合美術社は昭和11年に札幌でも展覧会への出品を行っており(『札幌百年のあゆみ』1970年)、画材販売とともに地方展覧会への作品供給を担った会社であると考えられる。リストには石井柏亭・岸田劉生以下、当時の大家の名前が並ぶほか佐伯祐三や鍋井克之などの名前も見え、油画・水彩・泥絵・エッチング・版画など多彩なジャンルの作品が展示された。京都新進作家は吉田五豊、玉舎春輝、玉井莊雲など10名。図書館が美術館としての機能を併せ持ったことを示す資料であると言えよう。(丹羽、多田)



個人蔵

日本図書館協会大会

大正6年(1917)11月、第3回日本図書館協会九州支部大会が行われた。この年は戊辰戦争50年祭、島津久光30年祭、島津忠義20年祭に当たり、これに合わせて鹿児島で開催されたものと思われる。

それから10年、昭和2年(1927)は西南戦争戦没者50年祭に当たり、西郷隆盛を初めとする薩摩藩士たちを追悼するための盛大な祭典が行われた。これと新鹿児島県立図書館(現在の鹿児島県立博物館の建物)の落成に合わせ、10月22日から24日の3日間、新図書館を会場に第21回日本図書館協会大会が開催され、全国から図書館長や図書館関係者が鹿児島に集まった。大会プログラムは以下のようなものであった。

〔第1日〕 午前 新築落成式参列／新図書館縦覧／南洲翁遺品展覧会観覧
午後 開会式／公開講演会／協議会

〔第2日〕 午前 協議会
午後 見学(西郷洞窟・同終焉の地・南洲神社(記念撮影)・磯邸・尚古集成館・桜島など)／懇親会

〔第3日〕 午前 南洲翁五十年祭参列 昼食 閉会式

下の写真は南洲墓地における集合写真で、『図書館雑誌』96号(昭和2年11月)にも掲載されている。最前列中央、帽子を左手で自身の前に持っている小柄な男性が、『広辞苑』の編者、新村出(京都帝国大学教授・同図書館長)、その左が今井貫一(大阪府立図書館長)である。最前列右から三人目が伊東尾四郎(福岡県立図書館長)で、続いて中津親義(元熊本県立図書館長)、永山時英(長崎県立長崎図書館長)。奥田啓市鹿児島県立図書館長は写真右隅の大灯籠の下に佇んでいる。(丹羽)



南洲墓地に集う図書館関係者たち(長崎県立長崎図書館蔵)

皇室国体国民精神に関する図書目録

昭和3年の御大典記念事業の一環として、県立図書館所蔵書の中から「皇室を主体とし国体、憲法、国民性、国民道徳に関するものを輯めた」目録。1500部印刷され、同年11月に配布されたという（昭和3年11月7日「鹿児島新聞」）。

巻頭の「注意」には、「郷土関係の忠孝、愛国、勤王、武士道などに関する図書及文書は本館刊行郷土志料分類目録を御覧下さい」というただし書きがある。目録内の図書分類にも「忠孝」「愛国」「勤王」「武士道」の項目が存在するのだが、「皇室」と「郷土関係」とが切り分けられている事実は、この目録が即位大典を機として発行されたという事情を差し引いた上でなお重要であろう。12年後の昭和15年(1940)に出る、「皇紀二千六百年」をめぐる出版物では、両者の境界は失われ、「郷土」を見る眼と「国体」を見る眼とは次第に一つのものとして受感されてゆくことになるのである。（多田）



鹿児島大学附属図書館蔵

博物館と科学館

第三部の総説（19ページ）で触れたように、桜島の大爆発をきっかけとして、大正3年（1914）4月、鹿児島県立図書館に博物館が設置され、桜島噴火に関する資料や模型・標本類を展示することが決定、準備が進められた。現在でも鹿児島県立図書館に桜島の絵画が残されている（貴重書に指定）のは博物館の前身である博物部の成立に由来している。

図書館二階には桜島噴火記念室・大典記念室・博物陳列室（3室、計52坪）が置かれ、博物部はこれらを管理・運営した。博物陳列室には各種の生物の標本、鉱物標本、機械などが置かれ、県立図書館の初期には学生中心に一日平均20～30人、夏季休暇には大勢の学生が詰めかけ、物理実験の機械が壊れるほどの盛況ぶりを見せたという。

一方、鹿児島県科学館は戦時中の昭和20年2月28日に開館、加治屋図書館長が館長を兼務した。毎月一回、日常生活に必要な科学的知識と技術講座、「小国民発明創作展」などを開催していく。時局柄、「電波兵器講座」「綿火薬製造」など軍事的なものが青少年向けに開設されている。（丹羽）

麿城（鹿児島）史談会と『神代三山陵』

麿城史談会（鹿児島史談会）は、明治末年に結成された鹿児島の郷土史家および学者が定期的に集まり、歴史を中心とする談話を行った会である。たとえば、大正2年（1913）6月25日には、夕方六時より山下町照國神社々務所に於て臨時会を開き、頼山陽の薩摩入り、高山仲繩の薩摩入り、文久三年の前濱戦争、関ヶ原戦役、明治十年役、薩摩とキリシタン、薩藩時代の青年訓箴等に於ける史績について談話を交換したという（鹿児島新聞）。同日の出席会員は阿久根成磨、川村俊秀、坂田長愛、名越那珂次郎、遠矢才二、東郷重毅、中村初枝、池田米男であった。この他に図書館長（片山信太郎、奥田啓市）、七高教授の武藤長平、第一中学校の伊地知茂七、鹿児島新聞記者の阿世知国良、郷土史家の加藤雄吉、家村助太郎、木脇藤次郎ら加わることが多い。なお、大正中期には下竜尾町の黒田清健の家で例会が開かれた。発表内容は新聞を通じて読者に発信された。鹿児島新聞紙上でしばしば史談会の情報が出るのは、同社の記者池田米男がメンバーであったからに他ならない。

大正8年（1919）には嘉永朋党事件で処罰された人々を追悼して『薩摩嘉永殉難志士祭典録』を出版するが、大正末には会の活動が鈍くなったようで、昭和6年（1931）3月15日、伊地知峻（黒田清健の兄）の鹿児島市冷水町の自宅で再興が図られる。『木脇藤次郎日記』にはこの時の模様が次のように記されている。

今日ハ午後より史談會中興發起の意味の會合に冷水伊地知氏邸ニ至る。會するもの二十人位なりし。先づ伊地知氏主旨を陳述、發起の承諾を求め、夫より池田、家村氏等委員として簡單なる會則を撰定、次會ニ提出することゝし、夫より平田猛氏、吉野村史蹟ニ関する建碑一件を話し、矢上城趾ニハ獨力で建設せし旨を陳べ、村で村史を編纂する積りなるも抄取らぬから自分が先づ其目録見た様のものを出版することゝし、代金參拾弍にて頒つと云われし故、一部申込を為し、其内の一節、岩切信夫氏が丁丑役ニ熊本ニて乃木將軍の聯隊旗奪取當時の実話筆記を平田氏讀上げ、一同謹聴せり。夫より宴ニ入り、サツマスシなどの饗あり。八時過散會せり。會費ハ五十弍つゝなりき。
…（略）…

また、昭和10年には天皇の陸軍特別大演習のための来鹿を記念して史談会は『神代三山陵』を発刊する。白尾国柱「神代山陵考」・「神代三陵取調書」、後醍醐院真柱「神代三陵志」・樺山資雄「神代三陵異考」、田中頼庸「高屋山陵考」という薩摩の国学者が神代の山陵について考証した論考を収める。

昭和13年には雑誌「鹿児島史林」を刊行。また昭和15年には岩元禧「皇祖發祥聖蹟」を刊行した。（丹羽）



【神代三山陵】

島津田鶴子と鹿児島史料

島津田鶴子（1870 - 1953）は公家の竹内治則^{たけのうちのり}の二女。初めは庸姫、後に^{たずひめ}鶴姫。結婚後は田鶴子と名乗る。16歳で玉里島津家第二代の島津忠済^{しまづただなり}と結婚し、鹿児島へ下る。その後、島津家の東京移転に従って東京三年町（現、千代田区霞が関3丁目）の屋敷で暮らす。大正4年（1915）8月、忠済が死去すると、まだ学生であった長男の忠承を、相談役と連携しながら支えた。

田鶴子には明治末年から昭和25年までの日記がほぼ揃って現存するが、大正9年から昭和3年までの日記の表紙の見返しには本居宣長の次の和歌（『鈴屋集』、『明倫和歌集』所収）が書き付けられているのがみえる。

ふみよまで何につれづれをなぐさまむ
春さめの比 秋の長き夜

座右の銘としたものだろうか。また、大正12年（1923）には、松方正義からの書籍の借用に関する次のような記事が見える。

晴 六月二十四日 日

無事、入浴なし、御神前へ参拝、午后一時過渋谷へ皆遊び参り候御事、午後六時過帰邸、康久様渋谷へ被為入候事、

昨日松方公よりかねて約速の^(マ)白川楽翁の御著書持参、借用致し候事、

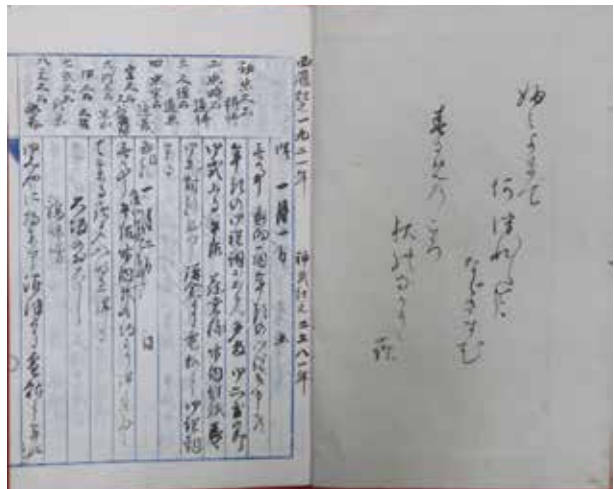
おほえ、

白川楽翁小傳 一
白川名勝舊蹟小誌 一
松平楽翁公真蹟本 古々呂雙紙釋文 一
楽翁公遺書 上中下

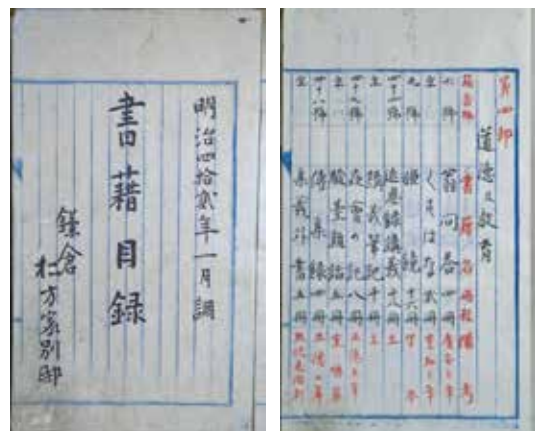
右松方公より借用、

白川楽翁とは寛政の改革で知られる文人大名、松平定信のこと。田鶴子は松方から定信の著作や自筆本を松方から借り受けている。当時松方は玉里島津家の顧問を務めていた。

田鶴子は鹿児島を「故郷」とよび、墓参を兼ねてしばしば訪れた。昭和6年（1931）3月の来鹿の折には、郷土史の研究書を推薦するよう、典医の中江佐八郎に命じ、これを受けて中江は玉里文庫の蔵書管理をしていた木脇藤次郎に入手を依頼、藤次郎は鹿児島の古書店をめぐって「薩藩叢書」などを購入して東京へ送っている（『昭和6年木脇藤次郎日記』）。鹿児島の古記録を集めた『故郷のしおり』はその成果である。（丹羽）



大正11年の『島津田鶴子日記』（個人蔵）の冒頭



『録倉松方家別邸書籍目録』（明治43年、個人蔵）表紙と本文

三代館長 加治屋哲一 図書を守る戦い

加治屋哲一（1886 - 1966）は鹿児島県日置郡田布施村（現在の日置市田布施）の出身、明治39年（1906）に鹿児島師範学校を卒業し、小学校の訓導を経て、東京帝国大学農科大学附属農業教員養成所に入る。同校を卒業後、高知県および熊本県の師範学校教諭兼訓導などを歴任。大正11年（1922）に鹿児島にもどり、県立第二高等女学校教諭、鹿児島県社会教育主事となる。昭和9年（1934）から大阪府に転じ、社会教育主事、大阪青年塾堂長、同19年（1944）5月1日に鹿児島県立図書館長となり、戦後の昭和22年7月5日まで館長を務めた。



加治屋哲一（長崎県立長崎図書館蔵）

加治屋は農業教育および青年教育を専門として、社会教育の重要な柱である図書館事業にも深く関与、遅くとも昭和2年から日本図書館協会会員となっている。

加治屋の館長時代は戦時体制下であるとともに、日本軍が制海権を失ってからは激しい空襲を避けながら図書館および科学館の運営と図書と資料の防衛に心を砕く日々を送る。また、敗戦後は経済変動や民主化のうねりの中に身を置いて活動している。加治屋はその日々の出来事を書き留めた壮絶な日記を残している（『加治屋哲日記』・『加治屋哲回顧録』）。

現在、鹿児島県立図書館に残されている『加治屋哲日記』二冊は、市販の四百字詰原稿用紙にペンで書かれたもの（自筆）で、館長就任の昭和19年5月1日から22年7月8日の記載がある。一方、『加治屋哲回顧録』は、加治屋逝去の翌年、昭和42年2月に同刊行会（代表 川村純二）によって刊行されたもの。両者は共に日記の形式をとるが、本文を比較すると、数々の異同を有している。

次ページは『回顧録』の昭和20年4月—沖縄戦が行われた前後のもの—と8月の一節で、当時すでに鹿児島は米軍機による空襲に見舞われており、4月8日には平之町一帯（照国神社から南へ甲突川に至る一帯）が空襲で灰と化した。『回顧録』ではわかりにくいですが、この日の空襲で山野田一成（立憲政友会党员、実業家）が焼死した。また、玉里島津家の家令九良賀野幹の悲報が届く。12日、さらに追い打ちをかけるように、加治屋の長男の戦死の電報が届く。そうした中で、加治屋は図書館を守るために中学生を動員し、4階書庫に土を入れる作業を行う。6月17日、鹿児島大空襲。鹿児島の中心部は一面焼野原となった。図書館に火が迫る。この時の様子を加治屋は次のように記す（『回顧録』）。

山形屋が燃える、県庁も燃えるといふ…、本願寺別院は影を止めず…合掌

……（中略）……前五時南館の棟は落つ、水道は止まる…神助

日本間に駈けて、神棚を館長室え、重要図書を玄関え、火勢は静まる、万歳、有難し、

8月2日には重要書類8ふくろ囊を伊敷青年師範学校の横穴に疎開。こうした加治屋らの努力によって蔵書9万冊は焼失を免れた。この間、各地の図書館は戦争の被害を多く受けていた。たとえば空襲によって蔵書とともに全焼した福岡県立図書館、宮崎県立図書館、原爆の被害を受けた長崎図書館。これらに比べると被害がわずかであったのは「天佑」と言う他はない。（丹羽）

『加治屋哲回顧録』〔昭和二十年〕（抄）

空襲来 四月八日（日）晴、前五時起床、潔斎照国神社参拝、七時三機航空会社奉戴式講演

八時登館、吉江君え託して帰宅、待避壕構築の処に大阪声田秋窓甥西村敏夫君及友人中村氏来訪、岩崎谷荘え宿所紹介の途端……

米機来襲第一撃―君等を送り出して第二撃―我が家の戸障子硝子墜つ！昼食して急遽登館す

平之町一帯倒壊延焼、

広瀬病院、橋本訪問無事安堵、登館、新地より県庁を訪ひ夕刻帰来

片岡、有馬氏送別会も流れけり

四月九日（月）曇、雨、八時登館市内戦禍や甚大なり。午後三時大本営発表、沖縄戦果甚大と有難し

○戦果、戦禍いざや立たなん春の雨

平之町山野田一成翁葬儀参列、成尾氏○○氏を弔ふ ○八十翁桜花と散りけり焼野かな……（中略）……

図書館防災 四月十二日（木）晴、戦災のあと紀男のこと、図書館防災を思念の処に…来電（南中佐）

六ガツ五ヒコナンショウニテメイヨノセンシヲトゲラル、アトフミ「ミナミ

○有難や江南の野にパット散る

戦友のあとをおひて大君の醜のみたてと散るぞ雄々しき

……（中略）……

四階土入 四月十三日（金）晴 科学館山元君の手伝を得て四階に土入構築をはじめた

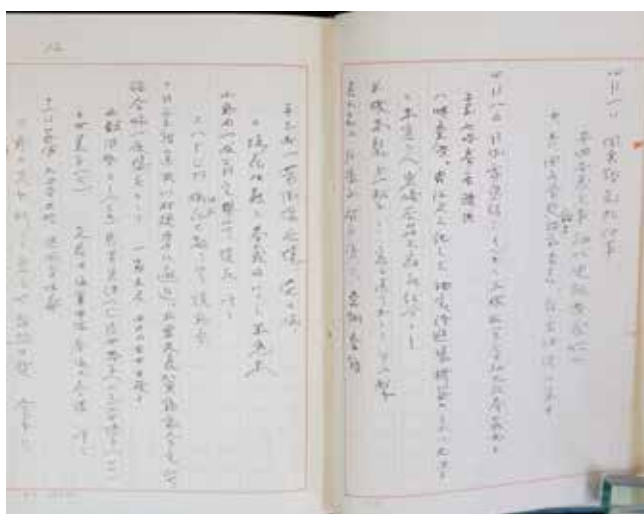
十五日（日） 鹿児島市中二年級四十余名来館、書庫補強土入作業実施、午前十一時空襲の為中止

……（中略）……

八月二日（木） 早晩起床、小雨止み、九時登館、岡積君、江藤君、疎開珍本を積荷して待ちいたり三人して

伊敷街道を引き進む、天佑―曇静…十時半着、鈴木校長に迎られ、

○珍本八雲横穴疎開颱風静か



『加治屋哲日記』昭和20年4月（鹿児島県立図書館蔵）

戦前の図書館と戦後の図書館—椋鳩十と島尾敏雄—



椋鳩十（久保田彦穂）

椋鳩十（1905-1987、本名久保田彦穂）は、昭和22年（1947）11月13日に第四代鹿児島県立図書館長に就任し（同年7月5日から11月2日までは社会教育課長の栗川久雄が官庁事務取扱として兼務）、昭和41年（1966）まで在職した。加治木高等女学校校長事務取扱という久保田の前職は、戦前の図書館長の履歴に比してやや異例であり（昭和22年11月14日「南日本新聞」）、童話作家・椋鳩十としての役割が期待されたのだと考えられる。戦後、東京都立図書館長の土岐善麿（歌人、昭和26年就任）、岩手県立図書館長の鈴木彦次郎（小説家、昭和22年就任）、宮崎県立図書館長の中村地平（作家、昭和22年就任）など、文学者が図書館の要職にあたる例は多い（叶沢清介「図書館、そしてPTA母親文庫」昭和63年3月「法政図書館人の会会報」）。後の昭和33年（1958）4月1日に県立図書館奄美分館館長として就任した作家・島尾敏雄（1917-1986）も、この中に数えることができるだろう。

戦後の県立図書館の大きな特徴として、県内の各所に出張所を設ける「貸出文庫」事業によって、市町村立の図書館を県立図書館がバックアップしてゆく体制（いわゆる「鹿児島方式」）を整えたことが挙げられる。さらに鹿児島の農業人口を念頭に置いた「農業文庫」（昭和27年～）の試みも行われた。これらの取り組みは、児童が教科書以外の本を二十分間音読し、母が傍らでそれを聴く、という「母と子の二十分間読書運動」とあわせ、県内全域へと本が広める運動が推進されていったのである。奄美分館における島尾敏雄もまたこうした運動に参加していたことは、彼の日記（かごしま近代文学館蔵）に詳しい。

ひとところに集め置かれ、先端的な〈知〉を汲み取るべき「書物」から、より広く共通され、コミュニティの礎となる「図書」へ——右に挙げた戦後図書館の取り組みを、「文化国家」主義による図書館史上の転換点として見ることも、ひとまずは可能である。文学者たちの就任が、本が持つ情報としての側面のみならず表現の側面を強調する結果を生み、結果的に文学書の比重を高めたことも想像に難くない。ただし椋（加藤）や島尾の館長としての取り組みが戦前における図書館運営と全く断絶したものではありえず、むしろ戦後における図書館運営は戦前期の諸課題をより強く意識する形で展開してもいた点を、最後に強調しておきたいと思う。

「貸出文庫」の試みが戦前の「巡回文庫」を引き継ぐものであることは言うまでもないし、大正期から昭和戦前期の「通俗図書選択目録」に見える利用者数への目配りが、戦後図書館において持続している点も見逃せない。また児童書の読書運動は、奥田啓市館長のもとで行われた「童話の会」をはじめとする読書推進運動の命脈を、結果的に繋ぐものとなってもいた。島尾敏雄は奄美文献の収集整理に力を注ぎ、史談会にも積極的に参加していたが、南洋と奄美との関わりを意識し「琉球弧」構想を唱えた島尾にとって、あるいは奄美博物館内併設図書室と米軍政府下の大島情報文化会館・日米文化会館とをその前身とした奄美分館にとって、「郷土」ないし「地域」の語は微妙な意味の揺れを含む。奄美分館の郷土史料は、結果的に、南洋・奄美・文学の三者が複雑に折り重なった様相を呈していったのである（工藤邦彦「文人図書館長・島尾敏雄コレクション」の形成過程に関する一考察」平成28年2月「別府大学紀要」）。

戦後における図書館の大衆化・文学化と地域資料収集との複雑な関係は、近代の最初期以来引き継がれてきた問題を拡大して呈示したのもとも言える。どのような〈知〉を、誰のもとに届けるのか？「書籍館」の設立から今日までの鹿児島の書物史と図書館史は、この問いをめぐる不断の「問いかけ」として存在しているのである。（多田）



島尾敏雄文学碑（旧県立図書館奄美分館官舎内）

近代鹿児島県の図書館略年表

年号 (西暦)	事 項	備 考
明治12年 (1879)	3月～7月 清国・王韜を薩摩文人グループが迎える	
明治14年 (1881)	6月 川辺郡知覧村に新聞縦覧所設置	
明治16年 (1883)	4月 肝属郡根占村川北に私立根占書籍館を設置	
明治20年 (1887)	11月 黒田清隆『環游日記』刊行	鹿児島県教育会設立
明治30年 (1897)	吉村兼富ら川内図書館倶楽部を設立	帝国図書館設置
明治33年 (1900)	5月 鹿児島県教育会が図書館設立のための寄付を募集開始	9月加納久宜知事離任
明治35年 (1902)	8月 鹿児島県教育会附属図書館開館	
明治43年 (1910)	8月 鹿児島県で巡回文庫を始めて実施	
明治44年 (1911)	1月 沖永良部島和泊村に南洲文庫設置 教育会附属図書館を鹿児島図書館と改称	
明治45年 (1912)	4月 鹿児島図書館を移管して鹿児島県立図書館設立 10月 宮之城村立図書館設立	7月明治天皇崩御
大正2年 (1913)	2月 熊毛郡南種子村立図書館設立	
大正3年 (1914)	4月 鹿児島県立図書館に博物部を設置 9月 九州図書館連合会設立	1月12日桜島大噴火
大正4年 (1915)	8月 長崎県立長崎図書館の初代館長として 永山時英 (元七高造士館教授) が着任 12月 鹿児島県立図書館内に大典記念文庫設置	11月大正天皇即位式
大正6年 (1917)	10月 隈之城村に私立川内図書館設置 6月 犬童英輔らにより加治木町立図書館設立 11月 第3回日本図書館協会九州支部大会を 鹿児島県立図書館で開催／史料展覧会	11月戊辰戦役五十年祭
大正10年 (1921)	2月 初代鹿児島県立図書館長片山信太郎移籍 奥田啓市館長が長崎図書館から赴任	
大正13年 (1924)	1月 図書館奨励の県訓令・図書館費補助の県令が出される。	
大正14年 (1925)	10月 第11回日本図書館協会九州支部総会を 県立図書館で開催、九州支部を鹿児島に置く	
昭和2年 (1927)	10月 鹿児島県立図書館落成式／全国図書館大会	10月西郷南洲五十年祭
昭和3年 (1928)	6月 鹿児島県立図書館に大典記念博物館を設置	11月昭和天皇即位式
昭和4年 (1929)	7月～8月 与謝野鉄幹・晶子夫妻来鹿	
昭和8年 (1933)	9月 図書館令の改正により県立図書館が中央図書館となる	
昭和17年 (1942)	10月 斎藤茂吉来鹿	
昭和19年 (1944)	5月 加治屋哲館長着任	
昭和20年 (1945)	2月 科学館設置 6月17日 鹿児島大空襲 県立図書館周辺は焼失する も奇跡的に図書館は被災を免れる	

平成30年度 鹿児島大学附属図書館貴重書公開

鹿児島 書物と図書館の近代

— 〈知〉の集積と展開 —

平成30年11月7日発行

編 者

丹羽 謙治(鹿児島大学教授)
多田 蔵人(鹿児島大学准教授)

執筆者

高津 孝(鹿児島大学教授)
金井 静香(鹿児島大学教授)
瀧田 みゆき(鹿児島大学大学院人文社会研究科博士後期課程)
周 倩(鹿児島大学大学院人文社会研究科博士後期課程)
景 徳(鹿児島大学大学院人文社会研究科博士後期課程)
高 春燕(鹿児島大学大学院人文社会研究科博士後期課程)

発 行

鹿児島大学附属図書館 <https://www.lib.kagoshima-u.ac.jp>
〒890-0065 鹿児島市郡元1丁目21-35
☎099-285-7460

印 刷

斯文堂株式会社



平成30年度鹿児島大学附属図書館貴重書公開「鹿児島 書物と図書館の近代 ―〈知〉の集積と展開―」図録 正誤表 平成30年11月27日

頁	修正箇所	誤	正
p8	上の図版のキャプション	王韜『普法戦記』(個人蔵)	王韜『普法戦紀』(個人蔵)
p8	本文16行目	…普仏戦争史『普法戦記』は…	…普仏戦争史『普法戦紀』は…
p9	下の図版のキャプション3行目	古典学者の鈴鹿三七が加藤雄吉に贈呈したもの	古典学者の鈴鹿三七が加藤雄吉に提供し、図書館で筆写したもの
p10	下の図版のキャプション	『誌経』(ミュージアム知覧蔵)	『詩経』(ミュージアム知覧蔵)
p11	本文下から1行目	…なお、明治44年1月16日より館名を…	…なお、明治42年1月16日より館名を…
p17	本文36行目	…受入日として鹿児島教育会附属図書館に、…	…受入日として私立鹿児島図書館に、…
p18	本文2行目	日本で始めて実施されたのは…	日本で初めて実施されたのは…
p18	本文23行目	…私立教育会附属当時の巡回文庫の	…私立鹿児島図書館当時の巡回文庫の
p21	本文1行目	…加賀前田家に使える…	…加賀前田家に仕える…
p21	本文13行目	…「郷土資料」の収集に尽力した…	…「郷土史料」の収集に尽力した…
p22	本文4～5行目	…明治27年(1897)年4月に帝国図書館官制が…	…明治27年(1897)4月に帝国図書館官制が…
p26	図版のキャプション	『観光集』巻七冒頭部表(鹿児島立図書館蔵)	『観光集』巻七冒頭部(鹿児島県立図書館蔵)
p27	下の図版のキャプション	『薩摩名家歌集』第六編(鹿児島大学附属図書館蔵)	『薩摩名家歌集』第六編(鹿児島大学附属図書館蔵)
p30	中段左「鹿児島図書館」印のキャプション	「鹿児島図書館」明治44年の改称後、翌年にかけて極短い期間使用された。	「鹿児島図書館」明治42年の改称後、45年の県立図書館への移管までの短い期間使用された。
p34	上の図版のキャプション	昭和15年5月8日、奥田啓市宛斎藤茂吉書簡(長崎県立長崎図書館蔵)	昭和16年6月8日、奥田啓市宛斎藤茂吉書簡(長崎県立長崎図書館蔵)
p41	上の図版のキャプション	大正11年の『島津田鶴子日記』(個人蔵)の冒頭	大正10年の『島津田鶴子日記』(個人蔵)の冒頭
p45	年表7段目～9段目	明治35年(1902) 8月 鹿児島県教育会附属図書館開館 明治43年(1910) 8月 鹿児島県で巡回文庫を始めて実施 明治44年(1911) 1月 沖永良部島和泊村に南洲文庫設置 教育会附属図書館を鹿児島図書館と改称	明治35年(1902) 8月 鹿児島県教育会附属図書館開館 明治42年(1909) 1月 教育会附属図書館を鹿児島図書館と改称 明治43年(1910) 8月 鹿児島県で巡回文庫を初めて実施 明治44年(1911) 1月 沖永良部島和泊村に南洲文庫設置